

2011 年度(平成 23 年度)

学校法人東海大学事業報告書・財務報告書

(私立学校法 47 条に関する書類)

学校法人東海大学

1. 財産目録
2. 貸借対照表
3. 収支計算書
4. 事業報告書
5. 監事による監査報告書

1. 財 産 目 録

財 産 目 録

(2012年3月31日現在)

I. 資	産	総	額			332,380,019,907円
			内 1 基	本	財	産
			2 運	用	財	産
			[3 収	益	事	業
				用	財	産
						659,664,527円]
II. 負	債	総	額			82,192,451,672円
			[収	益	事	業
				用	負	債
						121,412,180円]
III. 正	味	財	産			250,187,568,235円

(注記 当財産目録の資産の評価は取得価格基準による。)

財産目録内訳

[1] 資 産

1 基本財産	数	量	価 額(円)
(1) 土 地		5,468,841.16m ²	59,572,791,073
(2) 建 物		1,064,196.74m ²	114,916,190,006
(3) 図 書		3,280,707冊	16,805,001,091
(4) 教 具 ・ 校 具 ・ 備 品		457,116点	13,200,289,270
(5) 構 築 物			12,448,481,316
(6) 車 両		182台	237,518,498
(7) 船 舶		1隻	32,768,767
(8) 舟 艇		6隻	296,455
(9) ソ フ ト ウ ェ ア			558,068,429
(10) 建 設 仮 勘 定		土 地	18,883,585
		建 物	110,382,600
		構 築 物	0
	合 計		217,900,671,090 円

2 運用財産	数	量	価 額(円)
(1) 預 金 ・ 現 金			45,230,141,398
(2) 積 立 金			32,920,226,646
(3) 有 価 証 券		1,272,127株	1,556,156,370
(4) 出 資 金			369,088,529
(5) 不 動 産		土地1,638,424.26m ² 他	14,170,558,433
(6) 未 収 入 金			13,790,870,845
(7) そ の 他			5,093,433,180
(8) 建 設 仮 勘 定		土 地 他	1,348,873,416
	合 計		114,479,348,817 円

3 収益事業財産			659,664,527 円
----------	--	--	---------------

[2] 負 債

1 固定負債	数	量	金 額(円)
(イ) 長 期 借 入 金			36,884,710,000
(ロ) 長 期 未 払 金			2,561,602,530
(ハ) 退 職 給 与 引 当 金			11,878,267,457
(ニ) そ の 他			71,891,200
	合 計		51,396,471,187 円

2 流動負債	数	量	金 額(円)
(イ) 短 期 借 入 金			4,088,190,000
(ロ) 前 受 金			8,665,450,350
(ハ) 未 払 金			12,736,337,339
(ニ) そ の 他			5,306,002,796
	合 計		30,795,980,485 円

3 収益事業負債			121,412,180 円
----------	--	--	---------------

[3] 借 用 財 産

		面 積(m ²)	
(1) 土 地			457,274.60
(2) 建 物			1,363.09
			458,637.69 m ²

2. 貸借対照表

貸借対照表

2012年3月31日

資産の部

(単位:円)

科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
固 定 資 産	272,458,426,318	272,907,198,937	△ 448,772,619
有 形 固 定 資 産	232,862,034,510	233,272,063,459	△ 410,028,949
土 地	68,237,845,015	68,145,117,296	92,727,719
建 物	120,155,492,638	120,679,805,728	△ 524,313,090
構 築 物	12,714,683,175	12,559,439,490	155,243,685
教 育 研 究 用 機 器 備 品	12,524,908,511	12,154,680,407	370,228,104
図 書	16,805,001,091	16,726,178,957	78,822,134
建 設 仮 勘 定	1,478,139,601	2,192,068,016	△ 713,928,415
そ の 他 有 形 固 定 資 産	945,964,479	814,773,565	131,190,914
そ の 他 の 固 定 資 産	39,596,391,808	39,635,135,478	△ 38,743,670
諸 引 当 資 産	22,187,651,320	22,157,554,079	30,097,241
ソ フ ト ウ ェ ア	558,068,429	751,195,070	△ 193,126,641
松 前 重 義 記 念 基 金	10,732,575,326	10,398,222,846	334,352,480
そ の 他 固 定 資 産	6,118,096,733	6,328,163,483	△ 210,066,750
流 動 資 産	59,921,593,589	58,350,476,212	1,571,117,377
現 金 預 金	45,230,141,398	44,509,501,745	720,639,653
未 収 入 金	13,790,870,845	12,833,264,714	957,606,131
そ の 他 流 動 資 産	900,581,346	1,007,709,753	△ 107,128,407
資 産 の 部 合 計	332,380,019,907	331,257,675,149	1,122,344,758

負債の部

科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
固 定 負 債	51,396,471,187	53,268,146,232	△ 1,871,675,045
長 期 借 入 金	36,884,710,000	40,970,300,000	△ 4,085,590,000
長 期 未 払 金	2,561,602,530	1,986,805,728	574,796,802
退 職 給 与 引 当 金	11,878,267,457	10,238,969,304	1,639,298,153
そ の 他 固 定 負 債	71,891,200	72,071,200	△ 180,000
流 動 負 債	30,795,980,485	28,658,142,529	2,137,837,956
短 期 借 入 金	4,088,190,000	3,756,170,000	332,020,000
未 払 金	12,736,337,339	11,661,341,401	1,074,995,938
前 受 金	8,665,450,350	8,740,709,900	△ 75,259,550
そ の 他 流 動 負 債	5,306,002,796	4,499,921,228	806,081,568
負 債 の 部 合 計	82,192,451,672	81,926,288,761	266,162,911

基本金の部

科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
第 1 号 基 本 金	426,094,627,106	416,184,372,057	9,910,255,049
第 4 号 基 本 金	9,103,000,000	9,103,000,000	0
基 本 金 の 部 合 計	435,197,627,106	425,287,372,057	9,910,255,049

消費収支差額の部

科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
翌年度繰越消費支出超過額	185,010,058,871	175,955,985,669	9,054,073,202
消費収支差額の部合計	△ 185,010,058,871	△ 175,955,985,669	△ 9,054,073,202
科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
負債の部・基本金の部及び消費収支差額の部合計	332,380,019,907	331,257,675,149	1,122,344,758

※ 貸借対照表の概要については「4. 事業報告書」の中に記載しております。

3. 収支計算書

2011年度資金収支計算書

自 2011年4月 1日
至 2012年3月31日
収入の部

学校法人東海大学

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
学生生徒等納付金収入	50,359,820,000	50,378,223,410	△ 18,403,410
授 業 料 収 入	26,291,350,000	26,300,453,810	△ 9,103,810
入 学 金 収 入	3,085,440,000	3,085,688,750	△ 248,750
教 育 運 営 費 収 入	7,369,770,000	7,373,337,036	△ 3,567,036
教 育 充 実 費 収 入	1,053,800,000	1,054,750,000	△ 950,000
施 設 設 備 資 金 収 入	12,774,370,000	12,779,626,900	△ 5,256,900
そ の 他 納 付 金 収 入	35,340,000	35,347,800	△ 7,800
授 業 料 等 軽 減 額	△ 250,250,000	△ 250,980,886	730,886
手 数 料 収 入	1,130,630,000	1,156,405,964	△ 25,775,964
入 学 検 定 料 収 入	1,089,310,000	1,115,034,000	△ 25,724,000
試 験 料 収 入	3,060,000	3,596,680	△ 536,680
証 明 手 数 料 そ の 他 収 入	38,260,000	37,775,284	484,716
寄 付 金 収 入	1,629,330,000	1,685,635,009	△ 56,305,009
特 別 寄 付 金 収 入	885,000,000	933,464,637	△ 48,464,637
一 般 寄 付 金 収 入	744,330,000	752,170,372	△ 7,840,372
補 助 金 収 入	13,184,570,000	14,195,193,425	△ 1,010,623,425
国 庫 補 助 金 収 入	7,957,100,000	8,955,865,933	△ 998,765,933
地 方 公 共 団 体 補 助 金 収 入	5,227,470,000	5,239,327,492	△ 11,857,492
資 産 運 用 収 入	1,097,800,000	1,254,768,652	△ 156,968,652
受 取 利 息 ・ 配 当 金 収 入	297,880,000	326,856,520	△ 28,976,520
施 設 設 備 利 用 料 収 入	799,920,000	927,912,132	△ 127,992,132
資 産 売 却 収 入	57,740,000	173,418,857	△ 115,678,857
事 業 収 入	62,516,820,000	63,009,115,247	△ 492,295,247
補 助 活 動 収 入	165,300,000	170,377,737	△ 5,077,737
付 属 事 業 収 入	234,460,000	235,122,215	△ 662,215
受 託 事 業 収 入	1,208,110,000	1,354,170,430	△ 146,060,430
医 療 収 入	60,908,950,000	61,249,444,865	△ 340,494,865
雑 収 入	3,653,030,000	3,891,974,369	△ 238,944,369
私 立 大 学 退 職 金 財 団 交 付 金 収 入	2,238,150,000	2,311,845,100	△ 73,695,100
私 学 退 職 金 団 体 交 付 金 収 入	314,880,000	345,916,000	△ 31,036,000
雑 収 入	1,100,000,000	1,234,213,269	△ 134,213,269
借 入 金 等 収 入	8,003,000,000	8,002,600,000	400,000
前 受 金 収 入	8,701,380,000	8,665,450,350	35,929,650
授 業 料 前 受 金 収 入	2,934,800,000	2,875,968,650	58,831,350
入 学 金 前 受 金 収 入	2,969,870,000	3,006,750,000	△ 36,880,000
教 育 運 営 費 前 受 金 収 入	840,990,000	829,631,300	11,358,700
教 育 充 実 費 前 受 金 収 入	44,740,000	44,460,000	280,000
施 設 設 備 資 金 前 受 金 収 入	1,910,980,000	1,908,634,000	2,346,000
そ の 他 納 付 金 前 受 金 収 入	0	6,400	△ 6,400
そ の 他 の 収 入	13,543,680,000	14,952,038,760	△ 1,408,358,760
退 職 給 与 引 当 資 産 か ら の 繰 入 金 収 入	129,550,000	129,547,626	2,374
前 期 末 未 収 入 金 収 入	13,191,990,000	13,183,470,379	8,519,621
そ の 他	222,140,000	1,639,020,755	△ 1,416,880,755
資 金 収 入 調 整 勘 定	△ 21,460,610,000	△ 22,947,189,009	1,486,579,009
期 末 未 収 入 金	△ 12,719,880,000	△ 14,206,479,109	1,486,599,109
前 期 末 前 受 金	△ 8,740,730,000	△ 8,740,709,900	△ 20,100
前 年 度 繰 越 支 払 資 金	44,509,501,745	44,509,501,745	0
収 入 の 部 合 計	186,926,691,745	188,927,136,779	△ 2,000,445,034

※ 資金収支計算書の概要については「4. 事業報告書」の中に記載しております。

2011年度資金収支計算書

自 2011年4月 1日
至 2012年3月31日
支出の部

学校法人東海大学

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
人 件 費 支 出	65,406,730,000	65,376,131,941	30,598,059
教 員 人 件 費 支 出	30,952,420,000	30,878,042,984	74,377,016
職 員 人 件 費 支 出	31,490,100,000	31,387,585,462	102,514,538
役 員 報 酬 支 出	101,270,000	100,691,360	578,640
退 職 金 支 出	2,862,940,000	3,009,812,135	△ 146,872,135
教 育 研 究 経 費 支 出	47,569,340,000	46,641,803,139	927,536,861
消 耗 品 費 支 出	9,325,700,000	9,095,402,314	230,297,686
光 熱 水 費 支 出	2,616,090,000	2,654,222,564	△ 38,132,564
旅 費 交 通 費 支 出	870,160,000	841,698,247	28,461,753
奨 学 費 支 出	1,400,140,000	1,350,738,892	49,401,108
印 刷 製 本 費 支 出	632,410,000	539,127,272	93,282,728
通 信 運 搬 費 支 出	319,120,000	286,563,855	32,556,145
修 繕 費 支 出	2,967,090,000	2,856,617,353	110,472,647
賃 借 料 支 出	1,623,750,000	1,527,398,018	96,351,982
委 託 費 支 出	10,064,560,000	9,783,166,654	281,393,346
医 療 経 費	16,352,140,000	16,459,801,447	△ 107,661,447
そ の 他	1,398,180,000	1,247,066,523	151,113,477
管 理 経 費 支 出	7,544,820,000	7,247,221,818	297,598,182
消 耗 品 費 支 出	359,190,000	325,437,760	33,752,240
光 熱 水 費 支 出	422,550,000	414,519,816	8,030,184
旅 費 交 通 費 支 出	224,620,000	194,675,897	29,944,103
印 刷 製 本 費 支 出	460,950,000	436,223,579	24,726,421
広 告 費 支 出	382,240,000	387,654,019	△ 5,414,019
通 信 運 搬 費 支 出	103,100,000	85,468,689	17,631,311
修 繕 費 支 出	233,000,000	198,935,830	34,064,170
賃 借 料 支 出	1,015,060,000	1,017,455,406	△ 2,395,406
委 託 費 支 出	2,759,990,000	2,692,100,690	67,889,310
公 租 公 課 支 出	318,900,000	284,260,844	34,639,156
そ の 他	1,265,220,000	1,210,489,288	54,730,712
借 入 金 等 利 息 支 出	902,470,000	908,586,367	△ 6,116,367
借 入 金 等 返 済 支 出	11,756,170,000	11,756,170,000	0
施 設 関 係 支 出	6,840,900,000	6,559,811,565	281,088,435
土 地 支 出	549,290,000	133,882,050	415,407,950
建 物 支 出	4,768,960,000	4,433,946,135	335,013,865
構 築 物 支 出	1,415,690,000	1,367,718,395	47,971,605
建 設 仮 勘 定 支 出	106,940,000	623,944,585	△ 517,004,585
そ の 他	20,000	320,400	△ 300,400
設 備 関 係 支 出	5,473,220,000	5,278,291,613	194,928,387
教 育 研 究 用 機 器 備 品 支 出	4,837,540,000	4,643,868,741	193,671,259
そ の 他 の 機 器 備 品 支 出	260,010,000	257,589,138	2,420,862
図 書 支 出	262,460,000	256,956,877	5,503,123
そ の 他	113,210,000	119,876,857	△ 6,666,857
資 産 運 用 支 出	831,120,000	1,194,055,667	△ 362,935,667
退 職 給 与 引 当 資 産 へ の 繰 入 支 出	367,260,000	128,623,700	238,636,300
施 設 設 備 引 当 資 産 へ の 繰 入 支 出	4,010,000	4,005,163	4,837
特 定 引 当 資 産 へ の 繰 入 支 出	20,300,000	27,016,004	△ 6,716,004
松 前 重 義 記 念 基 金 へ の 繰 入 支 出	339,480,000	634,343,480	△ 294,863,480
そ の 他	100,070,000	400,067,320	△ 299,997,320
そ の 他 の 支 出	12,146,890,000	12,430,049,018	△ 283,159,018
貸 付 金 支 払 支 出	317,510,000	324,905,000	△ 7,395,000
前 期 未 払 金 支 払 支 出	11,436,550,000	11,658,161,972	△ 221,611,972
そ の 他	392,830,000	446,982,046	△ 54,152,046
予 備 費	0	0	0
資 金 支 出 調 整 勘 定	△ 9,018,760,000	△ 13,695,125,747	4,676,365,747
期 末 未 払 金	△ 8,630,540,000	△ 13,307,955,802	4,677,415,802
前 期 末 前 払 金	△ 388,220,000	△ 387,169,945	△ 1,050,055
次 年 度 繰 越 支 払 資 金	37,473,791,745	45,230,141,398	△ 7,756,349,653
支 出 の 部 合 計	186,926,691,745	188,927,136,779	△ 2,000,445,034

2011年度消費収支計算書

自 2011年4月 1日
至 2012年3月31日

消費収入の部

学校法人東海大学

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
学 生 生 徒 等 納 付 金	50,359,820,000	50,378,223,410	△ 18,403,410
手 数 料	1,130,630,000	1,156,405,964	△ 25,775,964
寄 付 金	1,684,320,000	1,800,458,903	△ 116,138,903
特 別 寄 付 金	885,000,000	933,464,637	△ 48,464,637
一 般 寄 付 金	744,330,000	752,170,372	△ 7,840,372
現 物 寄 付 金	54,990,000	114,823,894	△ 59,833,894
補 助 金	13,184,570,000	14,195,193,425	△ 1,010,623,425
国 庫 補 助 金	7,957,100,000	8,955,865,933	△ 998,765,933
地 方 公 共 団 体 補 助 金	5,227,470,000	5,239,327,492	△ 11,857,492
資 産 運 用 収 入	1,097,800,000	1,254,938,944	△ 157,138,944
資 産 売 却 差 額	44,700,000	90,324,796	△ 45,624,796
事 業 収 入	62,516,820,000	63,009,115,247	△ 492,295,247
雑 収 入	3,653,030,000	3,897,416,795	△ 244,386,795
帰 属 収 入 合 計	133,671,690,000	135,782,077,484	△ 2,110,387,484
基 本 金 組 入 額 合 計	△ 10,736,270,000	△ 9,910,255,049	△ 826,014,951
消 費 収 入 の 部 合 計	122,935,420,000	125,871,822,435	△ 2,936,402,435

消費支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
人 件 費	67,036,730,000	67,015,430,094	21,299,906
教 員 人 件 費	30,952,420,000	30,878,042,984	74,377,016
職 員 人 件 費	31,490,100,000	31,387,585,462	102,514,538
役 員 報 酬	101,270,000	100,691,360	578,640
退 職 給 与 職 金	2,862,940,000	2,930,259,148	△ 67,319,148
退 職 給 与 引 当 金 繰 入 額	0	90,848,050	△ 90,848,050
退 職 給 与 引 当 金 特 別 繰 入 額	1,630,000,000	1,628,003,090	1,996,910
教 育 研 究 経 費	58,095,890,000	57,286,648,824	809,241,176
消 耗 品 費	9,325,700,000	9,095,402,314	230,297,686
光 熱 水 費	2,616,090,000	2,654,222,564	△ 38,132,564
旅 費 交 通 費	870,160,000	841,698,247	28,461,753
奨 学 費	1,400,140,000	1,350,738,892	49,401,108
印 刷 製 本 費	632,410,000	539,127,272	93,282,728
通 信 運 搬 費	319,120,000	286,563,855	32,556,145
修 繕 費	2,967,090,000	2,856,617,353	110,472,647
賃 借 料	1,623,750,000	1,527,398,018	96,351,982
委 託 費	10,064,560,000	9,783,166,654	281,393,346
減 価 償 却 額	10,526,550,000	10,478,522,863	48,027,137
医 療 経 費	16,352,140,000	16,626,124,269	△ 273,984,269
そ の 他	1,398,180,000	1,247,066,523	151,113,477
管 理 経 費	8,750,250,000	8,485,065,668	265,184,332
消 耗 品 費	359,190,000	325,455,360	33,734,640
光 熱 水 費	422,550,000	414,519,816	8,030,184
旅 費 交 通 費	224,620,000	194,675,897	29,944,103
印 刷 製 本 費	460,950,000	436,223,579	24,726,421
広 告 費	382,240,000	387,654,019	△ 5,414,019
通 信 運 搬 費	103,100,000	85,850,654	17,249,346
修 繕 費	233,000,000	198,935,830	34,064,170
賃 借 料	1,015,060,000	1,017,455,406	△ 2,395,406
委 託 費	2,759,990,000	2,692,100,690	67,889,310
公 租 公 課	318,900,000	284,260,844	34,639,156
奨 学 金 免 除 額	78,660,000	113,540,000	△ 34,880,000
減 価 償 却 額	1,126,770,000	1,123,184,053	3,585,947
そ の 他	1,265,220,000	1,211,209,520	54,010,480
借 入 金 等 利 息	902,470,000	908,586,367	△ 6,116,367
資 産 処 分 差 額	895,070,000	1,164,811,285	△ 269,741,285
徴 収 不 能 引 当 金 繰 入 額	84,570,000	65,353,399	19,216,601
予 備 費	0	0	0
消 費 支 出 の 部 合 計	135,764,980,000	134,925,895,637	839,084,363
当 年 度 消 費 支 出 超 過 額	12,829,560,000	9,054,073,202	3,775,486,798
前 年 度 繰 越 消 費 支 出 超 過 額	175,955,985,669	175,955,985,669	0
翌 年 度 繰 越 消 費 支 出 超 過 額	188,785,545,669	185,010,058,871	3,775,486,798

※ 消費収支計算書の概要については「4. 事業報告書」の中に記載しております。

収益事業計算書

貸借対照表

2012年3月31日

東海大学出版会

(単位:円)

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
[流 動 資 産]	658,796,223	[流 動 負 債]	121,412,180
現 金 預 金	61,732,278	買 掛 金	36,830,341
受 取 手 形	670,000	未 払 金	52,090,114
売 掛 金	103,249,607	賞 与 引 当 金	1,510,000
商 品	428,475,160	返 品 調 整 引 当 金	13,000,000
委 託 品	27,143,648	そ の 他	17,981,725
仕 掛 品	6,987,268		
未 収 入 金	29,736,860		
そ の 他	1,761,402		
貸 倒 引 当 金	△ 960,000	負 債 の 部 合 計	121,412,180
[固 定 資 産]	868,304	純 資 産 の 部	
(有 形 固 定 資 産)	784,970	元 入 金	912,391,104
車 両	173,734	当 期 未 処 理 損 失	△ 374,138,757
器 具 備 品	611,236		
(投 資 等)	83,334		
破 産 更 生 債 権 等	1,697,560		
長 期 前 払 費 用	83,334		
貸 倒 引 当 金	△ 1,697,560	純 資 産 合 計	538,252,347
資 産 の 部 合 計	659,664,527	負 債 ・ 純 資 産 の 部 合 計	659,664,527

損益計算書

自 2011年4月1日

至 2012年3月31日

東海大学出版会

(単位:円)

科 目	金 額
I 営業損益	
1. 売 上 高	282,513,762
2. 売 上 原 価	157,271,653
売上総利益	125,242,109
返品調整引当金戻入額	12,000,000
返品調整引当金繰入額	13,000,000
差引売上総利益	124,242,109
3. 販 売 費 及 び 一 般 管 理 費	119,473,428
営業利益	4,768,681
II 営業外損益	
営業外収益	27,915,205
営業外費用	68,056,340
本 会 計 へ の 繰 入 前 損 失	35,372,454
当 期 損 失	35,372,454
前 期 損 失	338,766,303
当 期 末 損 失	374,138,757

4. 事業報告書

建学の精神	4-1
総長挨拶	4-1
学園の沿革	4-2
設置する学校・学部・学科等	4-5
入学定員及び学生数の状況	4-8
役員の状況	4-10
教職員数	4-10
事業の概要	4-11
決算の概要	4-36
財務関係経年比較表他	4-40

建学の精神

創立者松前重義は、青年時代に「人生いかに生きるべきか」について思い悩み、内村鑑三の研究会を訪ね、その思想に深く感銘を受けるようになりました。特にデンマークの教育による国づくりの歴史に啓発され、生涯を教育に捧げようと決意して「望星学塾」を開設しました。ここに東海大学の学園の原点があります。

創立者松前はこの「望星学塾」に次の四つの言葉を掲げました。

若き日に汝の思想を培え

若き日に汝の体軀を養え

若き日に汝の知能を磨け

若き日に汝の希望を星につなげ

ここでは、身体を鍛え、知能を磨くとともに、人間、社会、自然、歴史、世界等に対する幅広い視野をもって、一人ひとりが人生の基盤となる思想を培い、人生の意義について共に考えつつ希望の星に向かって生きていこうと語りかけています。

本学園は、このような創立者の精神を受け継ぎ、明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てることにより、「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ、歩み続けていきます。

新しい文明社会へ向かって

今日の文明社会は、高度の科学技術によって支えられています。20世紀の人類はわずか100年の間に月に到達し、原子の火を燃やし、遺伝子という生命の謎を解く鍵を手に入れました。その一方で私たちは、こうした先端技術が、扱い方を間違えれば人類を危機に導きかねないという時代に生きています。あるいは、近い将来100億人を超えるといわれる世界人口の増加は、地球の温暖化や食糧危機を促すといわれています。地球レベルでの環境破壊など、現代の文明社会の歪みも明らかになってきました。また、情報技術革命の進展は私たちの社会や生活のグローバル化を促進させる一方、世界では依然として地域紛争、民族・宗教対立が途絶えることはありません。そして、核軍縮が進んだといわれながらも、いまだ地球上には大量の核弾頭が存在しています。

こうした時代に、私たちは何をなすべきか——神やイデオロギーだけで人々の価値観が形成されていた時代は終わり、多様な価値観が存在するカオスの時代へ入りました。私たちはいま、21世紀初頭という大きな歴史の転換期に生きています。違う価値を排除するのではなく、多様な価値の存在を認めながらお互いが共存していく道を探っていくこと、そこに人と人、国と国、人と自然との新しい関係が生まれてくるはずで、生命科学の発達も、地球上の生きもの全てが同じ一つのいのちから生まれたことを明らかにしつつあります。私たち人類も何百万種といわれる地球上の生きものの一つとして存在しています。それゆえ、地球生命圏の一員としての新しい思想を構築しながら、未来の扉を開いていかなければなりません。

人類は長い歴史の中でさまざまな対立を繰り返してきました。これを克服し、人々が地球市民として心をつなぎ、人と社会と自然が共存できる新しい文明社会の実現をめざすこと——そこに学校法人東海大学の使命があるのです。

総長挨拶



学校法人東海大学
総長 松前 達郎

学園の沿革

- 1942 ・ 12 財団法人国防理工学園を創設
- 1943 ・ 4 航空科学専門学校を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 1944 ・ 4 電波科学専門学校を東京都中野区に開校、電波工業学校併設
- ・ 9 財団法人電気通信工学校(1937年設立)を合併
- 1945 ・ 8 財団法人東海学園と改称
- 8 航空科学専門学校と電波科学専門学校を合併、東海専門学校と改称。本校を静岡県清水市三保、分校を東京都府中市に設置
- 8 電気通信工学校と電波工業学校を合併、東海工業学校と改称
- 10 東海専門学校を東海科学専門学校と改称
- 1946 ・ 5 旧制大学令により東海大学認可、理工学部、経文学部、予科を静岡県清水市(現静岡市清水区)に設置
- 1948 ・ 4 東海高等学校を開校
- 4 東海大学実業高等学校を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 1949 ・ 4 東海大学第一中学校を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 1950 ・ 2 学制改革により新制大学として開学、工学部、文学部を設置
- 1951 ・ 3 私立学校法施行により学校法人東海大学となる
- 3 東海科学専門学校を廃止
- 4 東海大学高等学校を静岡県静岡市(現静岡市葵区)に開校
- 1952 ・ 4 東海大学(商科)短期大学部を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 4 東海高等学校を東海電波高等学校に改称
- 1955 ・ 1 東海大学工学部を静岡県清水市(現静岡市清水区)より東京都渋谷区に移転
- 4 東海大学付属高等学校を東京都渋谷区に開校
- 1958 ・ 4 東海大学文学部を静岡県清水市(現静岡市清水区)より東京都渋谷区に移転
- 4 東海大学付属幼稚園を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開園
- 1959 ・ 4 東海大学付属高等学校に通信教育部を設置
- 4 東海大学工業高等学校を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 1960 ・ 3 超短波放送実用化試験局(FM東海)を開局
- 1961 ・ 4 東海大学第二高等学校を熊本県熊本市(現熊本市東区)に開校
- 6 電子計算センターを設置
- 1962 ・ 4 東海大学出版会発足
- 4 東海大学海洋学部を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開設
- 5 東海大学海洋調査実習船「東海大学丸」が就航
- 1963 ・ 4 東海大学に大学院工学研究科を設置
- 4 東海大学湘南校舎を神奈川県平塚市に開設
- 4 東海大学第二工学部を東京都渋谷区に開設
- 4 東海大学(東京)短期大学部を東京都港区に開校、電気通信工学科を設置
- 4 東海大学付属相模高等学校を神奈川県相模原市(現相模原市南区)に開校
- 4 東海大学第三高等学校を長野県茅野市に開校
- 4 東海大学付属高等学校通信教育部を独立させ、東海大学付属望星高等学校を開校
- 1964 ・ 4 東海大学に理学部を設置
- 4 東海大学に別科(日本語研修課程)を設置
- 4 東海大学(熊本)短期大学部を熊本県熊本市(現熊本市東区)に開校、電気工学科、機械工学科を設置
- 4 東海大学第四高等学校を北海道札幌市南区に開校
- 1965 ・ 4 東海大学(女子)短期大学部を静岡県静岡市(現静岡市葵区)に開校、生活科学科を設置
- 1966 ・ 4 東海大学に政治経済学部を設置
- 4 東海大学福岡教養部を福岡県宗像郡宗像町(現宗像市)に開設
- 4 東海大学(女子)短期大学部に食物栄養学科を設置
- 4 東海大学第五高等学校を福岡県宗像郡宗像町(現宗像市)に開校
- 1967 ・ 4 東海大学大学院に海洋学研究科を設置
- 4 東海大学に体育学部を設置
- 4 東海大学札幌教養部を北海道札幌市南区に開設
- 4 東海大学付属小学校を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開校
- 1968 ・ 1 東海大学海洋調査実習船「東海大学丸二世」が就航
- 4 東海大学大学院に理学研究科を設置
- 4 東海大学に教養学部を設置
- 1969 ・ 4 東海大学大学院に文学研究科を設置
- 4 東海大学(女子)短期大学部に児童教育学科を設置
- 1970 ・ 5 東海大学海洋科学博物館を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開設
- 9 東海大学ヨーロッパ学術センターをデンマーク国コペンハーゲンに開設
- 1971 ・ 4 東海大学大学院に政治学研究科を設置
- 4 東海大学(熊本)短期大学部に建設工学科を設置
- 7 東海大学海洋調査実習船「望星丸」が就航
- 1972 ・ 4 東海大学工芸短期大学を北海道旭川市に開学
- 1973 ・ 4 東海大学大学院に芸術学研究科を設置
- 4 九州東海大学を熊本県熊本市(現熊本市東区)に開学、工学部を設置
- 4 九州東海大学阿蘇校舎を熊本県阿蘇郡長陽村(現阿蘇郡南阿蘇村)に開設
- 4 東海大学付属本田記念幼稚園を神奈川県伊勢原市に開園
- 5 東海大学人体科学博物館を静岡県清水市(現静岡市清水区)に開設

- 1974 ・ 4 東海大学医学部を神奈川県伊勢原市に開設
4 東海大学沼津教養部を静岡県沼津市に開設
4 東海大学医療技術短期大学を神奈川県平塚市に開学
- 1975 ・ 2 東海大学医学部付属病院を神奈川県伊勢原市に開設
- 1976 ・ 4 東海大学大学院に体育学研究科を設置
- 1977 ・ 3 東海大学(熊本)短期大学の電気工学科(第一部・第二部)、機械工学科(第一部・第二部)、建設工学科を廃止
- 1977 ・ 4 北海道東海大学を北海道旭川市に開学、芸術工学部を設置
- 1978 ・ 10 東海大学海洋調査実習船「望星丸二世」が就航
- 1979 ・ 4 東海大学大学院に経済学研究科を設置
12 東海大学付属高等学校、東海大学実業高等学校を廃止
- 1980 ・ 1 東海大学工芸短期大学を廃止
4 東海大学大学院に医学研究科を設置
4 九州東海大学に農学部を設置
4 東海大学付属相模中学校を神奈川県相模原市(現相模原市南区)に開校
- 1982 ・ 4 東海大学短期大学部(静岡)に商経学科第一部を設置し、商学科を商経学科第二部に名称変更
- 1983 ・ 4 東海大学付属仰星高等学校を大阪府枚方市に開校
12 東海大学医学部付属東京病院を東京都渋谷区に開院
- 1984 ・ 4 九州東海大学に大学院農学研究科を設置
4 東海大学医学部付属大磯病院を神奈川県中郡大磯町に開院
- 1986 ・ 4 東海大学に法学部を設置
4 東海大学第四高等学校付属中等部を北海道札幌市南区に開校
- 1988 ・ 3 東海大学札幌教養部、沼津教養部を廃止
4 北海道東海大学札幌校舎を北海道札幌市南区に開設、工学部、国際文化学部を設置
4 東海大学付属デンマーク校(高等部・中学部)をデンマーク国プレストー市に開校
- 1990 ・ 3 東海大学福岡教養部を廃止
4 東海大学福岡短期大学を福岡県宗像市に開設
4 東海大学大学院に法学研究科を設置
4 九州東海大学大学院に工学研究科を設置
4 北海道東海大学に大学院芸術学研究科を設置
6 学校法人東海高輪学園(東海大学付属高輪台高等学校)を合併
- 1991 ・ 4 東海大学開発工学部を静岡県沼津市に開設
- 1993 ・ 4 北海道東海大学大学院に理工学研究科を設置
6 学校法人精華学園(東海大学付属浦安高等学校、東海大学付属望洋高等学校、東海大学付属浦安中学校)を合併
10 東海大学海洋調査研修船「望星丸」が就航
- 1995 ・ 4 東海大学大学院に開発工学研究科を設置
4 東海大学健康科学部を神奈川県伊勢原市に開設
- 1996 ・ 4 学校法人東海福岡学園(東海大学付属自由ヶ丘幼稚園)を合併
4 東海大学付属仰星高等学校中等部を大阪府枚方市に開校
- 1999 ・ 4 東海大学大学院に健康科学研究科を設置
4 東海大学短期大学部電気通信工学科第一部、同第二部を情報・ネットワーク学科第一部、同第二部に名称変更
4 東海大学工業高等学校を東海大学付属翔洋高等学校に名称変更
10 東海大学第一高等学校を廃止
- 2000 ・ 4 九州東海大学に応用情報学部を設置
4 東海大学短期大学部情報・ネットワーク学科第一部を情報・ネットワーク学科に名称変更
- 2001 ・ 4 東海大学に電子情報学部を設置
4 東海大学短期大学部商経学科第二部を廃止し、商経学科第一部を商経学科に名称変更
- 2002 ・ 3 東海大学医学部付属八王子病院を東京都八王子市に開院
12 学校法人東海大学熊本学園(かもめ幼稚園)を合併
- 2003 ・ 4 東海大学短期大学部生活科学科を人間環境学科、商経学科を経営情報学科に名称変更
4 東海大学第一中学校を東海大学付属翔洋中学校に名称変更
4 かもめ幼稚園を東海大学付属かもめ幼稚園に名称変更
5 東海大学短期大学部の情報・ネットワーク学科第二部を廃止
- 2004 ・ 4 東海大学に専門職大学院を開設し、実務法学研究科を設置
4 東海大学医療技術短期大学の第一看護学科を看護学科に名称変更
4 東海大学第二高等学校、第三高等学校、第四高等学校、第五高等学校及び第四高等学校付属中等部を東海大学付属第二高等学校、付属第三高等学校、付属第四高等学校、付属第五高等学校及び付属第四高等学校中等部に名称変更
- 2005 ・ 3 東海大学医療技術短期大学の第二看護学科を廃止
4 東海大学に連合大学院(九州東海大学と北海道東海大学との連合)を開設し、理工学研究科、地球環境科学研究科、生物科学研究科を設置
4 北海道東海大学大学院に国際地域学研究科を設置
- 2006 ・ 4 東海大学電子情報学部を情報理工学部に変更
4 東海大学第二工学部を情報デザイン工学部に変更
- 2007 ・ 4 東海大学専門職大学院に組込み技術研究科を設置
4 東海大学大学院に人間環境学研究科を設置
4 東海大学付属高輪台高等学校中等部を東京都港区に開校
5 東海大学短期大学部の人間環境学科を廃止

- 2008 ・ 3 東海大学付属デンマーク校を閉校
- 4 東海大学国際文化学部、生物理工学部を北海道札幌市南区に開設
- 4 東海大学芸術工学部を北海道旭川市に開設
- 4 東海大学情報通信学部を東京都港区に開設
- 4 東海大学総合経営学部、産業工学部を熊本県熊本市(現熊本市東区)に開設
- 4 東海大学農学部を熊本県阿蘇郡南阿蘇村に開設
- 4 東海大学大学院に国際地域学研究科、芸術工学研究科、産業工学研究科、理工学研究科、農学研究科を設置
- 4 東海大学連合大学院(九州東海大学と北海道東海大学との連合)理工学研究科、地球環境科学研究科、生物科学研究科を東海大学大学院総合理工学研究科、地球環境科学研究科、生物科学研究科に名称変更
- 4 東海大学付属浦安中学校及び付属相模中学校を東海大学付属浦安高等学校中等部及び付属相模高等学校中等部に名称変更
- 5 九州東海大学の応用情報学部、農学部を廃止
- 9 九州東海大学大学院の工学研究科、農学研究科を廃止
- 9 九州東海大学大学院を廃止
- 9 北海道東海大学大学院の芸術学研究科、理工学研究科、国際地域学研究科を廃止
- 9 北海道東海大学大学院を廃止
- 2009 ・ 4 東海大学付属翔洋中学校を東海大学付属翔洋高等学校中等部に名称変更
- 5 北海道東海大学の国際文化学部を廃止
- 9 東海大学短期大学部の情報・ネットワーク学科を廃止
- 2010 ・ 4 東海大学に観光学部を設置
- 9 九州東海大学の工学部を廃止
- 9 九州東海大学を廃止
- 9 北海道東海大学の芸術工学部を廃止
- 9 北海道東海大学を廃止
- 2012 ・ 4 東海大学に生物学部を設置
- 4 東海大学大学院に情報通信学研究科を設置
- 4 東海大学付属第二高等学校を東海大学付属熊本星翔高等学校に名称変更

設置する学校・学部・学科等

2011年5月1日現在

大学名	学部名	学科名	(専攻・課程)
東海大学	文学部	文明学科	
		アジア文明学科	
		ヨーロッパ文明学科	
		アメリカ文明学科	
		北欧学科	
		歴史学科	日本史専攻 東洋史専攻 西洋史専攻 考古学専攻
		日本文学科	
		文芸創作学科	
		英語文化コミュニケーション学科	
		広報メディア学科	
	心理・社会学科		
	観光学部	観光学科	
	政治経済学部	政治学科	
		経済学科 経営学科	
	総合経営学部	マネジメント学科	
	法学部	法律学科	
	教養学部	人間環境学科	自然環境課程 社会環境課程
		芸術学科	音楽学課程 美術学課程 デザイン学課程
		国際学科	
	国際文化学部	地域創造学科 国際コミュニケーション学科	
	理学部	数学科	
		情報数理学科	
		物理学科 化学科	
	情報理工学部	情報科学科	
		コンピュータ応用工学科	
	情報通信学部	情報メディア学科	
		組込みソフトウェア工学科	
		経営システム工学科	
		通信ネットワーク工学科	
	工学部	生命化学科	
		応用化学科	
		光・画像工学科	
		原子力工学科	
		電気電子工学科	
		材料科学科	
		建築学科	
		土木工学科	
		精密工学科	
		機械工学科	
		動力機械工学科	
		航空宇宙学科	航空宇宙学専攻 航空操縦学専攻
		医用生体工学科	
		クラシカルデザイン学科	
	建築・環境デザイン学科		
	産業工学部	環境保全学科	
		電子知能システム工学科	
		機械システム工学科	
	海洋学部	建築学科	
		海洋文明学科	
		環境社会学科	
		海洋地球科学科	
		水産学科	生物生産学専攻 食品科学専攻
		海洋生物学科	
	生物理工学部	航海工学科	航海学専攻 海洋機械工学専攻
		生物工学科	
	農学部	海洋生物科学科	
		生体機能科学科	
	体育学部	応用植物科学科	
		応用動物科学科	
		バドミントン学科	
		体育学科	
		競技スポーツ学科	
	医学部	武道学科	
		生涯スポーツ学科	
	健康科学部	スポーツレジャーマネジメント学科	
		医学科	
	乗船実習課程	看護学科	
		社会福祉学科	
	別科日本語研修課程		

※1 改組改編等により募集停止となった学部学科等については、掲載していません。

大学院		研究科名	専攻名	博士課程前期 (修士課程)	博士課程後期 (博士課程)	
東海大学	専門職大学院	実務法学研究科	実務法律学専攻	法務博士 (専門職)		
		組込み技術研究科	組込み技術専攻	組込み技術修士 (専門職)		
		大学院	総合理工学研究科	総合理工学専攻	—	○
		地球環境科学研究科	地球環境科学専攻	—	○	
		生物科学研究科	生物科学専攻	—	○	
		文学研究科	文明研究専攻	○	○	
			史学専攻	○	○	
			日本文学専攻	○	○	
			英文学専攻	○	○	
			コミュニケーション学専攻	○	○	
		政治学研究科	政治学専攻	○	○	
		経済学研究科	応用経済学専攻	○	○	
		法学研究科	法律学専攻	○	○	
		人間環境学研究科	人間環境学専攻	○	—	
		芸術学研究科	音響芸術専攻	○	—	
			造型芸術専攻	○	—	
		国際地域学研究科	国際地域学専攻	○	—	
		理学研究科	数理科学専攻	○	—	
			物理学専攻	○	—	
			化学専攻	○	—	
		工学研究科	情報理工学専攻	○	—	
			電気電子システム工学専攻	○	—	
			情報通信制御システム工学専攻	○	—	
			応用理学専攻	○	—	
			光工学専攻	○	—	
			工業化学専攻	○	—	
			金属材料工学専攻	○	—	
			建築学専攻	○	—	
			土木工学専攻	○	—	
			機械工学専攻	○	—	
			航空宇宙学専攻	○	—	
			経営工学専攻	○	—	
			芸術工学研究科	生活デザイン専攻	○	—
			産業工学研究科	生産工学専攻	○	—
				情報工学専攻	○	—
				社会開発工学専攻	○	—
		開発工学研究科	情報通信工学専攻	○	—	
			素材工学専攻	○	—	
			生物学専攻	○	—	
			医用生体工学専攻	○	—	
		海洋学研究科	海洋工学専攻	○	—	
			水産学専攻	○	—	
			海洋科学専攻	○	—	
			海洋生物学専攻	○	—	
		理工学研究科	電子情報工学専攻	○	—	
			環境生物学専攻	○	—	
		農学研究科	農学専攻	○	—	
		体育学研究科	体育学専攻	○	—	
		医学研究科	先端医科学専攻	—	○	
			医科学専攻	○	—	
	健康科学研究科	看護学専攻	○	—		
		保健福祉学専攻	○	—		

短期大学名	学 科 名	
東海大学短期大学部 静岡県静岡市葵区	食物栄養学科	
	児童教育学科	
	経営情報学科	
東海大学医療技術短期大学 神奈川県平塚市	看護学科	
東海大学福岡短期大学 福岡県宗像市	情報処理科	
	国際文化学科	

※1 改組改編等により募集停止となった学部学科等については、掲載していません。

区分	学校名		
高等学校	東海大学付属浦安高等学校	全日制	千葉県浦安市
	東海大学付属望星高等学校	通信制	東京都渋谷区
	(静岡校)		静岡県静岡市葵区
	(熊本校)		熊本県熊本市
	(北海道校)		北海道札幌市南区
	(福岡校)		福岡県宗像市
	東海大学付属高輪台高等学校	全日制	東京都港区
	東海大学付属相模高等学校	全日制	神奈川県相模原市南区
	東海大学付属第二高等学校	全日制	熊本県熊本市
	東海大学付属第三高等学校	全日制	長野県茅野市
	東海大学付属第四高等学校	全日制	北海道札幌市南区
	東海大学付属第五高等学校	全日制	福岡県宗像市
	東海大学付属仰星高等学校	全日制	大阪府枚方市
	東海大学付属望洋高等学校	全日制	千葉県市原市
東海大学付属翔洋高等学校	全日制	静岡県静岡市清水区	
中等部	東海大学付属翔洋高等学校中等部		静岡県静岡市清水区
	東海大学付属浦安高等学校中等部		千葉県浦安市
	東海大学付属相模高等学校中等部		神奈川県相模原市南区
	東海大学付属高輪台高等学校中等部		東京都港区
	東海大学付属第四高等学校校中等部		北海道札幌市南区
東海大学付属仰星高等学校中等部		大阪府枚方市	
小学校	東海大学付属小学校		静岡県静岡市清水区
幼稚園	東海大学付属幼稚園		静岡県静岡市清水区
	東海大学付属本田記念幼稚園		神奈川県伊勢原市
	東海大学付属自由ヶ丘幼稚園		福岡県宗像市
	東海大学付属かもめ幼稚園		熊本県熊本市
海外法人	ハワイ東海インターナショナルカレッジ		アメリカ合衆国ハワイ州
連携校	東海大学甲府高等学校	学校法人東海大学甲府学園	山梨県甲府市
提携校	東海大学山形高等学校	学校法人東海山形学園	山形県山形市
	東海大学菅生高等学校	学校法人菅生学園	東京都あきる野市
	東海大学菅生高等学校中等部		

※学校法人一橋学園は2008.6.25で東海山形学園と改称しております。

入学定員及び学生数の状況

2011年5月1日現在

学校名	区 分		入学定員	収容定員	現員	
東 海 大 学	学部計		7,000	28,703	28,394	
	文学部		930	3,628	4,339	
	観光学部		195	390	478	
	政治経済学部		450	1,800	2,247	
	総合経営学部		200	800	435	
	法学部		300	1,200	1,476	
	教養学部		330	1,320	1,605	
	国際文化学部		210	840	740	
	理学部		320	1,280	1,528	
	情報理工学部		200	800	935	
	情報通信学部		320	1,280	1,352	
	工学部		1,460	5,540	5,638	
	情報デザイン工学部		0	120	66	
	芸術工学部		160	640	202	
	産業工学部		300	1,200	361	
	開発工学部		0	720	274	
	海洋学部		530	2,500	1,926	
	生物理工学部		200	800	455	
	農学部		230	920	968	
	体育学部		400	1,600	1,979	
	医学部		110	630	658	
	健康科学部		155	695	732	
	乗船実習課程					
	別科日本語研修課程					
	専門職大学院			60	180	81
	実務法学研究科		法務博士(専門職)	30	120	47
	組込み技術研究科		組込み技術修士(専門職)	30	60	34
	大学院計			615	1,388	1,275
	総合理工学研究科		博士課程	35	105	46
	地球環境科学研究科		博士課程	10	30	11
	生物科学研究科		博士課程	10	30	3
	文学研究科		博士課程(前期)	36	72	66
			博士課程(後期)	18	54	13
	政治学研究科		博士課程(前期)	10	20	7
			博士課程(後期)	5	15	3
	経済学研究科		博士課程(前期)	10	20	10
			博士課程(後期)	5	15	0
	法学研究科		博士課程(前期)	10	20	7
			博士課程(後期)	5	15	1
	人間環境学研究科		修士課程	10	20	20
	芸術学研究科		修士課程	8	16	24
	国際地域学研究科		修士課程	4	8	4
	理学研究科		修士課程	32	64	89
工学研究科		修士課程	214	428	665	
芸術工学研究科		修士課程	4	8	6	
産業工学研究科		修士課程	24	48	16	
開発工学研究科		修士課程	26	52	21	
海洋学研究科		修士課程	40	80	69	
理工学研究科		修士課程	12	24	9	
農学研究科		修士課程	12	24	17	
体育学研究科		修士課程	10	20	41	
医学研究科		修士課程	10	20	7	
		博士課程	35	140	91	
健康科学研究科		修士課程	20	40	29	

学校名	学科名	入学定員	収容定員	現員
東海大学短期大学部	学科計	280	560	394
	食物栄養学科	100	200	115
	児童教育学科	100	200	218
	経営情報学科	80	160	61
東海大学医療技術短期大学	看護学科	80	240	270
東海大学福岡短期大学	学科計	200	400	186
	情報処理科	100	200	72
	国際文化学科	100	200	114

区分	学校名	区 分	入学定員	収容定員	現員
高等学校	東海大学付属浦安高等学校	全日制	370	1,110	1,228
	東海大学付属望星高等学校	通信制	1,000	3,000	2,047
	東海大学付属相模高等学校	全日制	600	1,800	1,692
	東海大学付属高輪台高等学校	全日制	420	1,260	1,309
	東海大学付属翔洋高等学校	全日制	360	1,150	815
	東海大学付属第二高等学校	全日制	400	1,270	1,096
	東海大学付属第三高等学校	全日制	360	1,080	755
	東海大学付属第四高等学校	全日制	320	1,040	702
	東海大学付属第五高等学校	全日制	320	1,090	602
	東海大学付属仰星高等学校	全日制	400	1,120	956
	東海大学付属望洋高等学校	全日制	370	1,110	841
中学校	東海大学付属浦安高等学校中等部		120	360	433
	東海大学付属相模高等学校中等部		160	480	546
	東海大学付属高輪台高等学校中等部		80	240	270
	東海大学付属翔洋高等学校中等部		120	360	343
	東海大学付属第四高等学校中等部		80	240	131
	東海大学付属仰星高等学校中等部		120	360	327
小学校	東海大学付属小学校		60	360	134
幼稚園	東海大学付属幼稚園		65	165	87
	東海大学付属本田記念幼稚園		60	240	204
	東海大学付属自由ヶ丘幼稚園		80	320	328
	東海大学付属かもめ幼稚園		110	330	316

※小・中学校は学則定員、幼稚園は認可定員を記載しております。

役員状況

《 役員 》

2011年5月31日現在

	氏名	兼務の状況	常勤・非常勤の別	
理事数 定数18～21名 現員 20名	(理事長)	松前達郎 (学)東海大学総長、(学)国際武道大学理事長、(学)東海大学甲府学園理事	常勤	
	(副理事長)	香取草之助		〃
		松前義昭	(学)国際武道大学理事	〃
	(常務理事)	蟹江秀明	(学)東海大学甲府学園理事	〃
		木本雄一	(学)東海大学甲府学園理事	〃
		高野二郎	東海大学学長	〃
		安達建夫	東海大学副学長(事務担当)、同事務部部長	〃
		杉一郎	(学)東海大学初等中等教育部部長	〃
		田中康夫	東海大学副学長(企画・キャンパス連携担当)	〃
	(理事)	灰田宗孝	東海大学医療技術短期大学学長	〃
		大金真人	東海大学附属相模高等学校・中等部校長	〃
		遠藤武人	(学)東海大学甲府学園理事長	非常勤
		後藤亘	株式会社エフエム東京取締役相談役	〃
		平山正剛	弁護士、(学)国際武道大学理事	〃
		内田裕久	東海大学教授	常勤
		尾郷良幸	(株)霞ヶ関東海倶楽部代表取締役社長、(学)国際武道大学副理事長、(学)調布学園理事	非常勤
兼弘法子		(学)東海大学評議員	〃	
幕内博康		東海大学医学部附属病院本部本部長	常勤	
山下泰裕		東海大学体育学部学部長	〃	
後藤俊郎	(学)東海大学理事室室長、同広報部部長	〃		
監事数 定数2～4名/現員2名	(監事)	横堀禎二 (学)東海大学甲府学園監事(非常勤)	非常勤	
		淵上貫之 弁護士	〃	

《 評議員 》

(評議員) 39名 (2011年5月31日現在)

教職員数

	教員	職員
法人	13	70
大学	1,925	1,009
短期大学	72	42
高校	562	59
中学校	131	5
小学校	21	2
幼稚園	46	5
病院	0	2,898
合計	2,770	4,090

※ 教職員数は2011年5月1日現在

2011 年度事業の概要

1. 高等教育機関

【教育機関事業の推進】

(1) 2011 年度 東海大学海洋学部の改組転換（第Ⅱ期教育改革）

海洋学部の改組転換について、以下の内容で実施しました。

「海洋学部」（静岡県静岡市清水区）

設 置	「環境社会学科」	(入学定員 80 名、学位：学士 [海洋学])
	「海洋地球科学科」	(入学定員 80 名、学位：学士 [海洋学])
	「航海工学科 航海学専攻」	(入学定員 20 名、学位：学士 [海洋学])
	「航海工学科 海洋機械工学専攻」	(入学定員 60 名、学位：学士 [海洋学])
定員変更	「水産学科」	(入学定員 90 名 ⇒ 入学定員 120 名)
募集停止	「船舶海洋工学科」「海洋資源学科」「海洋科学科」「航海学科（航海専攻・国際物流専攻）」	

(2) 2011 年度 東海大学法科大学院の定員変更

東海大学法科大学院の入学希望者が減少していることを鑑み、昨年度に続き入学定員を減員しました。

「東海大学専門職大学院」（東京都渋谷区）

「実務法学研究科 実務法律学専攻」（入学定員：40 名 ⇒ 入学定員：30 名）

(3) 2012 年度 東海大学北海道キャンパスの改組転換（第Ⅲ期教育改革）

第Ⅲ期教育改革の一環として、東海大学北海道キャンパスの改組転換について、以下の内容で実施することになりました。

学部設置 「生物学部」（北海道札幌市南区）

「生物学科」 (入学定員 70 名、学位：学士 [理学])

「海洋生物科学科」 (入学定員 70 名、学位：学士 [理学])

「国際文化学部」（北海道札幌市南区）

学科設置 「デザイン文化学科」 (入学定員 70 名、学位：学士 [教養学])

定員変更 「国際コミュニケーション学科」 (入学定員 100 名 ⇒ 入学定員 80 名)

学部募集停止 「芸術工学部（くらしデザイン学科、建築・環境デザイン学科）」

「生物理工学部（生物工学科、海洋生物科学科、生体機能科学科）」

(4) 2012 年度 東海大学医学部の定員増

地域医療を担う医師の養成を図るために、神奈川県の実施する地域医療再生計画と連携し、入学定員を増員することになりました。

「医学部」（神奈川県伊勢原市）

「医学科」（入学定員 110 名 ⇒ 入学定員 113 名）

(注)3 名の増員は、2012 年度から 2019 年度までの期間限定の措置。

(5) 2012年度 東海大学大学院の改編（第Ⅲ期教育改革）

第Ⅲ期教育改革の一環として、また情報通信学部卒業生に対して専門教育の機会を提供するため、次の内容で実施することになりました。

研究科設置「情報通信学研究科」（東京都港区）

「情報通信学専攻（修士課程）」（入学定員 30 名、学位：修士〔情報通信学〕）

研究科募集停止「専門職大学院 組込み技術研究科（組込み技術専攻）」

専攻募集停止「工学研究科 情報通信制御システム工学専攻、経営工学専攻」

(6) 2013年度 東海大学九州キャンパスの改組転換（第Ⅲ期教育改革）

第Ⅲ期教育改革の一環として、東海大学九州キャンパスの改組転換について、以下の内容で実施することになりました。

学部設置 「経営学部」（熊本県熊本市東区）

「経営学科」 (入学定員 150 名、学位：学士〔経営学〕)

「観光ビジネス学科」 (入学定員 80 名、学位：学士〔経営学〕)

「基盤工学部」（熊本県熊本市東区）

「電気電子情報工学科」 (入学定員 80 名、学位：学士〔工学〕)

「医療福祉工学科」 (入学定員 60 名、学位：学士〔工学〕)

学部募集停止「総合経営学部（マネジメント学科）」

「産業工学部（環境保全学科、電子知能システム工学科、機械システム工学科、建築学科）」

(7) 2013年度 東海大学体育学部の定員変更（第Ⅲ期教育改革）

九州キャンパス改組に合わせて、体育学部の以下の学科について定員を変更することになりました。

「体育学部」（神奈川県平塚市）

「体育学科」 (入学定員 90 名 ⇒ 入学定員 100 名)

「競技スポーツ学科」 (入学定員 120 名 ⇒ 入学定員 130 名)

「武道学科」 (入学定員 50 名 ⇒ 入学定員 55 名)

「生涯スポーツ学科」 (入学定員 90 名 ⇒ 入学定員 100 名)

「スポーツ・レジャーマネジメント学科」 (入学定員 50 名 ⇒ 入学定員 55 名)

(8) 2013年度 募集停止について

東海大学大学院 芸術工学研究科及び東海大学短期大学部 経営情報学科を 2012 年 4 月より募集停止することになりました。

募集停止 「東海大学大学院 芸術工学研究科（生活デザイン専攻）」

「東海大学短期大学部 経営情報学科」

【その他高等教育機関における主な活動】

(1) 東海大学が豪州縦断「2011 ワールド・ソーラー・チャレンジ」で優勝

オーストラリア大陸の北端・ダーウィンから南部のアデレードまでを太陽光の力だけで走りきる、世界最大級のソーラーカーレース「2011 ワールド・ソーラー・チャレンジ」で、東海大学ソーラーカーチームがトップでフィニッシュし、一昨年に続き大会 2 連覇を達成しました。

10月16日、予選5位でスタートの東海大学は、同日中に1位に浮上。その後、後続との差を広げながら1位をキープ。マシントラブルを生じることもなく順調に走行し、現地時間(ダーウィン)10月20日13時過ぎに、約3,000kmを完走し、アデレードに到着しました。なお、大会側が発表した東海大学の全走行時間は32時間45分で、平均時速は91.54キロでした。



大会2連覇を達成したソーラーカーチーム

(2) 東海大学が「アジアン・ル・マン」で完走 総合22位

中国・広東省の珠海(ズーハイ)国際サーキットで開催された自動車レースの「アジアン・ル・マンシリーズ」で、東海大学工学部動力機械工学科のル・マンプロジェクトが11月13日の決勝に挑み、完走で29チーム中22位(LMP1クラス9台中8位)となりました。

12日の予選で29チーム中11位となった東海大学のマシンTOP03(登録チーム名「TOKAI UNIV. YGK POWER」)は、現地時間午前11時に6列目からのスタート。レースは6時間の走行距離を競うもので、スタートは第1ドライバーの卒業生・密山祥吾選手がハンドルを握り、ピットでは学生たちがタイヤ交換作業等に備えました。

総合順位を9位まで上げましたが、残り時間も少なくなってきた午後3時47分、左後輪のホイールが割れ、ブレーキホースを巻き込んで切れるというアクシデントが発生。横溝直輝選手の懸命なドライビングでピットに帰還し、学生スタッフ総動員で修復作業を行いました。ピット作業に28分間を要したものの、車両は再びレースへの復帰を果たしました。この間に総合順位は大きく後退しましたが、その後もドライバーとスタッフの懸命な努力により、現地時間の午後5時、スタートから6時間で計187周を走り切り、総合22位で無事チェッカーフラッグを受けました。



プロジェクトメンバーによるピット作業

(3) 東海大学が「2011年アメリカ建築家協会デザイン大賞特別賞」を受賞

東海大学チャレンジセンター「3.11生活復興支援プロジェクト」が、このほど「2011年アメリカ建築家協会デザイン大賞特別賞(Special Aspirational Award for Community Building)」(アメリカ建築家協会(AIA)日本支部主催)を受賞しました。

今回の受賞は、日本各地の大学より38作品の応募が寄せられた中から、応急建築物「どんぐりハウス」の活動が評価されたものです。

本プロジェクトは、3月11日に発生した東日本大震災に際し、国産間伐材を用いて簡易に建設可能で、ソーラーパネルを設備し環境にも配慮した応急建築物「どんぐりハウス」を開発。津波により流失した公民館を再建するため、これまでに岩手県大船渡市と宮城県石巻市に2棟の仮設公民館を建設しました。

審査員からは、学生が被災した地域の住民と一体となり建設し、地域の絆をより深めることを可能とする公共建築であることに対して高い評価を受け、今回の受賞にいたりました。



受賞した応急建築物「どんぐりハウス」

(4) 東海大学男子スキーチームが「全日本学生スキー選手権」で初の総合優勝

2012年2月21日から29日まで、岩手県雫石町及び八幡平市で開催された「第85回全日本学生スキー選手権大会」において、東海大学スキー部が男子1部で初の総合優勝、女子1部もまた初の総合準優勝となりました。

男子1部では、出場初日のアルペン大回転競技で1～3位の表彰台を独占し、続く回転競技でも1位を獲得。その後もクロスカントリー10kmクラシカルで2位、スペシャルジャンプ（ノーマルヒル）で1位になる等、出場7種目全てにおいて各選手が得点を重ね、目標にしていた総合優勝を果たしました。

また女子1部でも、スペシャルジャンプ（ノーマルヒル）で1位、アルペン回転競技で2位、3位に入る等、全6種目で着実に得点を加算し、総合2位となりました。



国際大会でも活躍する
小林潤志郎選手のジャンプ

【競争的資金等の獲得による教育研究の推進】

(1) 文部科学省「大学教育・学生支援推進事業（テーマA）」

SOHUMプログラムによる実践教育の提案

～ソーシャル・ヒューマンウェア（SOHUM）育成の学際的実践教育モデル～

【東海大学：2009年度採択】

本取り組みは、変化の激しい21世紀型社会に対応するための人間力を育成するための教育プログラムです。この「SOHUMプログラム」が、従来の学部教育と大きく異なる点は、ラーニングアウトカム型の教育プログラムとして設計されていることで、学修成果と成績評価基準を明確にした4段階（ステップ1～4）の達成目標が設定されていることがこのプログラムの特徴になっています。プログラムは、学部共通科目、SOHUM領域科目、プロジェクトの3つの要素を連携させたもので、学修成果は常に「SOHUMカルテ」の到達度でチェックされます。また、プログラムの要となる学内外の組織と連携して実施される実践的教育プログラム（プロジェクト）は、教養学部で行われてきた様々な取り組みをマッチングさせて学科横断型に再構築したものであり、ホームページの開設や公開シンポジウム等を通じて、このプログラムの意味や価値を広く学内外に普及していくものです。

2011年度も「SOHUMプラザ」にプログラム専従職員を配置し、学生の相談窓口としての機能を充実させた他、ホームページ管理作業や「SOHUMカルテ」のシステム管理、本事業の会計補助業務にあたり、学部総合センターとしての機能充実につとめました。また、「SOHUMカルテ」には、各学生の成績結果が、目標とされた能力に対する到達度や担当教員のコメントととも

に記録されました。学内外の様々な組織と連携したプロジェクト活動（実践的教育プログラム）については、実施場所の視察や提携団体と協同で実際の活動を行いました。更に、ホームページの常時更新体制の整備やプロジェクト毎と全プロジェクト合冊のパンフレット発行等で本取り組みの進行状況や結果報告を学内外に広く公表するとともに、学生のプロジェクトに対する理解と参加意欲、教員の意識を高めるために、プロジェクト全てで研修会や公開講座、ワークショップ、講演会、報告会、視察等を実施しました。



「ルワンダにおける和解と共生プロジェクト」の現地研修

(2) 文部科学省「大学教育・学生支援推進事業（テーマ B）」

大学、同窓会、保護者の三者一体による学生の就職力向上支援

【東海大学：2009 年度採択】

本取り組みは、大学、同窓会、保護者の三者が一体となり、学生の就職力向上と内定取消者への支援を行うものです。学生への直接の支援については、1) 相談体制の強化（内定取消者への対応、全学部への就職委員会設置、カウンセラーの増員）、2) 就職力向上・早期離職の防止（キャリア観醸成のための同窓生と学生との懇談会開催、同窓生による業界別セミナーの開催、企業経営者による教養講座の開催）を行います。また、全国各地で保護者向けの就職状況説明会を開催し、保護者の不安を解消することによって、学生が職業選択、企業選択の際に的確な支援が行えるようにします。

2011 年度は、同窓生・企業人の協力を得て各種講座・セミナーや模擬面接会、懇談会等を開催した他、新潟大学と合同でコミュニケーション力向上を目的とした 1・2 年次生対象の合宿も行いました。また、ミスマッチ防止のための優良中小企業等の情報提供や、ゼミやクラス等に向向いてのキャリアカウンセラーによるカウンセリングを行いました。更に、保護者対象の就職状況説明会を 12 会場で開催し、説明 DVD を上映して就職活動における保護者の役割の理解を深めてもらう等、順調に本取り組みを推進しました。

(3) 文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」

ナビゲーションシステムによる就業力育成

～学生の主体的学びの促進と企業人協力を通じた全学的な就業力育成体系の整備～

【東海大学：2010 年度採択】

本取り組みは、学生が、将来の目的に合わせた学修計画の策定や進路選択が容易にできるよう、教職員と企業人によるナビゲーション（相談、指導）体制を構築し、細やかな指導体制を確立するものです。また、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の 4 つの力を、培うべき「就業力」とし、社会的・職業的な自立を促すために、初年次から卒業までを体系化したキャリア教育に関するカリキュラムの構築を目指すものです。

2011 年度は、就業力育成支援室の設置・推進の他、全学的に使用するための就業力評価ツール（ルーブリック）の作成やキャリア教育科目の改善・新規開講準備を行いました。また、「学生を対象とした就業力評価育成システム」のモニタリングや事前事後指導を含むインターンシップの設計・検証作業、インターンシップへの企業側の意識調査も実施しました。更に、学外協力者のリスト化（就業力人材バンク）や教職員のナビゲーション能力向上研修・キャリアカウンセラー養成講座実施の他、WEB サイトの情報更新とインターンシップ紹介 DVD の制作による就業力育成支援事業に関する情報発信の強化等、順調に本取り組みを推進しました。

(4) 文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」

リフレクションによる就業力形成プログラム

～段階的自己形成システムの構築～

【東海大学短期大学部：2010 年度採択】

本取り組みは、段階的なプログラム実施と学びへのリフレクション（振り返り）を通して、学生の就業力を形成するプログラムです。段階的プログラム 1 は、入学時に実施され、目標の明示による学びへの動機づけを目的として行われます。段階的プログラム 2 は、1 年次の様々な学びによって、社会における自己の立ち位置の自覚、具体的な目標形成ができるようにします。段階的プログラム 3 では、1 年後期以降のインターンシップや実務家講義等により、目標にいたるために必要な資質・能力（スキル）の獲得を目指します。段階的プログラム 4 では、就職 1 年目既卒者に対する支援として実施し、心理的かつ実務的な支援により、早期離職者の低減を目指します。これら実施過程全般において、e-ポートフォリオ（電子カルテ）及び異段階間の交流、

ピアパートナー等を活用したリフレクション(振り返り)活動を導入することで、本取り組みは、より主体的な意欲と明確な目的意識を持った社会人・職業人の育成を目指します。

2011年度は、段階的プログラム1については、入学予定者に対するHPでの職業像の告知、事前指導、入学時オリエンテーションにおける職業像・将来像の明示により、入学生が入学後の学びの見通しが得られるようになりました。段階的プログラム2については、総合教育科目「現代文明論」においてC-Learning(e-ポートフォリオシステム)を活用した双方向授業を展開するとともに、キャリア支援科目「キャリアサポート」等において「心理検査」を実施することで、学生が自己の立ち位置を知り、目標を明確に意識できるようになりました。段階的プログラム3については、インターンシップの実施により、適切な職業観が形成され、より実践的なスキルを身に付けることができました。また、本学教員による、外部補助講師を活用した「就業力向上実践講座」を開講し、学生の社会における基本スキル及び専門スキル向上が図られました。更に、実務家による講義、就職して1~2年程度の本学卒業生による講義により、学生は社会で求められている資質能力を学ぶとともに、実際に職業人としてどのように振る舞うべきかを実践的に知ることができました。段階的プログラム4については、大学でのリカレント教育を実施するとともに、直近の既卒者の就職先への訪問サポートを行うことで、直近の既卒者を心理的に支援し、そこで得られた知見を教員が共有することで、在学生に対する指導をより適切なものにできました。これらにより、より社会の実態に即した形で学生の意識向上が図られました。リフレクションに係る事業については、無線LANを活かした可搬型端末及び固定端末を活用したe-ポートフォリオシステムをより適切に改修し、それを活用した指導教員の面談カウンセリングによって、学生は、社会で求められる自らの資質能力を客観的に振り返ることができるようになりました。また、指導教員と心理カウンセラー、キャリアカウンセラーによる相談援助活動を加えた連携支援形態により、孤立型学生のみならず社会に出る全学生の心理的かつ実践的な支援を行い、その結果、就職をしない学生の割合が大きく低減しました。

本事業は、今年度で終了いたしますが、これらの取り組みで得られた成果を継承し、今後も本学学生の就業力向上に努力いたします。

(5) 文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」

未来を拓く地域人材育成を目指す異分野大学連携による「旭川キャンパス」

【東海大学(共同事業):2009年度採択】

本取り組みは、北海道の旭川地区にある専門分野の異なる高等教育機関が協同し、地域のニーズや特徴を活かした連携教育事業を展開するものです。それぞれの専門領域で学生に「社会をデザインする力」を養い、地域に貢献しうる人材を輩出する取り組みです。具体的には単位互換・新融合領域科目等、多様性のある教育カリキュラムの創出、交流オフィスアワーの設定、旭川エリア連合学生自主組織「はしっくす」の活動支援、合同ファカルティ・デベロップメント、スタッフ・デベロップメントの実施、地域コミュニティの参画による創造教育・共同教育の充実を図ることを推進します。更にこの連携活動の恒常化を図り、旭川地域の産業活性化のため、新分野の創造や雇用の創出に尽力するとともに、学生に、地域の課題を自ら発見し、解決できる能力を育むために、教育と地域の活性化に寄与することも目指すものです。

旭川医科大学を申請代表として、6大学共同で取り組んでいます。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。

(6) 文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」

横浜文化創造都市スクールを核とした都市デザイン/都市文化の担い手育成事業

【東海大学(共同事業):2009年度採択】

本取り組みは、開港150周年を迎え、文化芸術創造都市事業を推進している横浜市の協力支援を受け、市内中心部に7大学によるサテライト教室を持つ「横浜文化創造都市スクール」を設

け、「文化芸術創造都市の担い手」を育成していく取り組みです。横浜周辺の6大学と、京都国際マンガミュージアムで先進的なプログラムを推進する京都精華大学が、先行実施している大学院建築都市スクール等で培ってきたノウハウと人的ネットワークを結集し、「都市文化創成」と「都市デザイン」の2つの部門で、専門のプロジェクリーダーの指導によるワークショップ型の実践教育を行い、街づくり、美術、映像、演劇、音楽、マンガ、出版等のイベントの企画・運営を教育課程に組み込んで、大学間と社会の壁を越えた文化のリノベーションを実践していくものです。また、学部・大学院共通の文理融合型カリキュラムを設け、豊富な知識と実践経験を兼ね備えた人材を育成するものです。

横浜国立大学を申請代表として、7大学共同で取り組んでいます。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。

(7) 文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」

畜産基地を基盤とした大学間連携による家畜生産に関する実践型総合教育プログラム開発

【東海大学（共同事業）：2009年度採択】

本取り組みは、肉用家畜で我が国随一の畜産基地である宮崎、熊本両県に立地する本学農学部と宮崎大学及び南九州大学が、これまで連携して取り組んできた教育研究活動を更に発展させ、宮崎県、熊本県、農業共済組合及び農業協同組合等からの協力を得て、共同インターンシップ、実践型フィールド実習、充実した初年次教育等を実施するものです。それにより、家畜生産現場での衛生管理から畜産物の加工・流通・消費までを総合的に見渡せる人材を養成する「新規の実践型統合教育プログラム」を開発して、教育システムの充実を図る計画で、更に、相互の授業参観や評価、ティーチング・ポートフォリオ等を導入・活用して、教員の教育力の向上も図るものです。

宮崎大学を申請代表として、3大学共同で取り組んでいます。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。



阿蘇キャンパスにおける適正家畜生産規範学実習

(8) 文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」

地域の人材育成に貢献する短期大学の役割と機能の強化のための戦略的短大連携事業

【東海大学福岡短期大学（共同事業）：2009年度採択】

本取り組みは、短大本来の目的である、地域に密着し、地域の中核を担う人材育成に貢献するために、北部九州（福岡、佐賀、長崎）の9つの短期大学が連携してコンソーシアムを形成、地盤沈下が指摘される短期大学の様々な課題を検討・見直すことで、将来における短期大学の機能や役割を新たに開発・発信していこうとするものです。

2011年度は、短期大学コンソーシアム九州における本学の担当事業である「初年次・教養教育の共同開発」に向けて、初年次教育学会への参加を始め、初年次・教養教育の先進的な事例収集のための視察や、本学・精華女子短期大学・西九州大学短期大学部の担当校3校での訪問交流会を実施しました。これらの他機関への視察・研究等で蓄積した知識を活用し、初年次教育の実践の場として新設された「フレッシュマンゼミナール」のカリキュラム作成や運営を行っています。12月には、「学生及び教職員を対象とする初年次・教養教育研修会」を本学主催で実施し、初年次・教養教育の今後の展開に向けて検討するとともに、1月には、GP事業の総括として、本コンソーシアム全体で「公開研究会」を開催し、推進事業の経過報告を行いました。2月には、本コンソーシアムを中心に、九州の他の短大にも参加を呼び掛け、短大教育の魅力をアピールするための「短大フェア」を実施しました。

(9) 文部科学省「国際化拠点整備事業（長期海外留学支援）」

若手研究者育成のための長期派遣留学支援

【東海大学：2008年度採択】

本取り組みの目的は、本学の建学の精神に則り、世界を舞台に活躍し、社会に貢献できる人材を育成するため、理工系学生等の海外での学位取得支援及び、既存の派遣留学プログラムから、更に高いステージでの研究を目指す学生等への支援をすることにより、グローバルな視野を持った若手研究者を育成し、本学の大学院教育全体の国際化に寄与することにあります。本取り組みを行うことにより、従来、海外での学位の取得や1年以上の長期留学を行う場合に、特に費用面での負担から、諦めざるを得ないという状況をなくし、そのような高いモチベーションを持った優秀な学生等を大学として支援し、また派遣することにより、研究活動に集中できる体制を整えることが可能となります。

2011年度は、現地指導教員からの定期的な状況報告を受け、派遣学生との頻繁なコンタクトを取る等のサポートを行ったことで、派遣学生が予定より1か月早く学位を取得することができました。また、派遣学生からの報告をホームページに更新した他、4月以降に実施される派遣留学説明会で体験談を発表してもらい、在学生の学修意欲向上を図ることで、引き続きグローバルな視野を持った若手研究者の育成に努めてまいります。

(10) 文部科学省「医師不足解消のための大学病院を活用した専門医療人材養成（大学病院間の相互連携による優れた専門医等の養成）」

地域躍動型専門医養成一貫教育プログラム

【東海大学医学部付属病院（共同事業）：2008年度採択】

本取り組みは、大学病院と地域医療を支える教育基幹病院が連携することにより、高度医療・地域医療・臨床研究の研修の質における大学・地域間格差の改善を効率的に図り、高度な専門知識や診療技術の修得とともに科学的思考能力を有する質の高い専門医師を育成することを目的としています。

慶應義塾大学を申請代表として、7大学病院が参画し進めています。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。



後期研修医や指導医などを対象としたシンポジウムを開催

(11) 文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」

南関東圏における先端のがん専門家の育成

～患者中心のチーム医療を牽引する人材養成の拠点づくり～

【東海大学医学研究科（共同事業）：2007年度採択】

本取り組みは、がん医療の臨床現場を牽引するスペシャリスト集団を養成する共同体を創出し、医師・コメディカル等全ての分野の統合的実践型教育を行って、南関東エリアでの先端のがん治療の均てん化に寄与することを目的としています。

北里大学を申請代表として、9大学共同で取り組んでいます。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。

(12) 文部科学省「大学病院における医師等の勤務環境の改善のための人員の雇用」

東海大学病院業務改善推進事業

【東海大学医学部付属病院：2010年度採択】

本取り組みは、大学病院のような急性期病院において、医師・看護師等の業務負担の軽減・支援を行う取り組みで、具体的には、独自の教育システムにより育成したメディカルセクレタリーを各所に配置し、従来、医師や看護師等が行ってきた事務的な業務を担当することで、医師や看護師の業務負担を軽減し診療・治療・看護に専念することができるようにするものです。本院の独自の業務は、「メディカルセクレタリー業務基準」に定めており、メディカルセクレタリー教育システムにより周知・徹底しています。また、診療情報管理士・薬剤師・臨床工学士・看護助手・医事課職員・病棟事務等において、業務分掌によりその役割を明確にし、分担を推進することによって医師・看護師等の業務効率の上昇、医療の質的向上を図るものです。

2011年度は、「東海大学医学部附属病院業務改善計画」を策定し、メディカルセクレタリー・診療情報管理士・薬剤師・看護助手・病棟事務・医療事務職員における役割分担を明確にすることで、医師が診療・治療等に専念することができる環境へ改善しました。また「メディカルセクレタリー教育システム」の中に業務改善計画を盛り込んだ他、外来に「メディカルセクレタリー」を配置し、具体的に業務を分担することで医師の事務的業務量削減に貢献しました。

(13) 文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」

糖鎖科学による免疫・脳神経・膜機能解析への新たな展開

【東海大学：2009年度採択】

本事業は、「糖鎖科学による免疫機能解析」「糖鎖科学による脳神経・膜機能解析」「ケミカルグライコバイオロジーによる新展開」の3テーマを設定し、免疫・脳神経・膜機能における糖鎖の機能解析を、本学が国内外に誇るケミカルバイオロジー研究と積極的に融合させ、新たな発展を目指すプロジェクトです。すでに機能解析の2グループには、特定の免疫細胞の人為的コントロール、神経細胞に対する新しい機能分子の発見につながる萌芽があり、免疫、脳機能に新たな視点を導入できると期待されています。また、機能解析グループと化学合成グループとの連携によって、他の研究機関に見られない融合研究が展開でき、機能の実用化に道が開けることも期待されています。

2011年度も本事業発展のための取り組みを推進しました。

(14) 文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」

疾患モデル動物とリード化合物を組み合わせた迅速な前臨床試験を実現する創薬研究拠点形成

【東海大学：2009年度採択】

本事業は、これまで本学で確立してきた多くの疾患モデル動物、新しい効率的遺伝子操作動物作成技術、標的タンパク質の特定部分に作用する化合物の効率的スクリーニング法、造腫瘍効果のin vivoスクリーニング法、また大学院医学研究科で推進している臨床試験等に必須の生命倫理及び医療倫理に基づく教育と研究等、本学医学部もしくは医学研究科の特徴や成果を結集し、総合的な創薬への道筋を推進する計画です。これまでの実績から、技術と成果の結集で、迅速性が確保される意義は大きいものとなっています。対象とする疾患やタンパク質によって難易度が異なると予想されるため、経緯を見ながら実現度の高い対象を選別し、優先的に検討することにより、数種の確実な成功例へ結実させるプロジェクトです。

2011年度も本事業発展のための取り組みを推進しました。

(15) 文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」

九州地域の農業発展を企図した環境適応性植物の作出と機能解析

【東海大学：2009年度採択】

本事業は、九州地域の特産を目指したシバ、雑穀、ブルーベリーを対象に、農業生産性を向上

させること、及びミズゴケを用いて水田の水質改善を行います。九州は周囲を海に囲まれており、海浜近くの田畑には海水が浸入しやすく、温暖化による海水面の上昇や台風の増加により塩害の危険性が増加すると思われるため、このような土壌でも生育可能な日本シバの作出を試み、雑穀の耐塩性機構を解析する計画です。また、近年の健康志向によりブルーベリーの需要が増加しつつありますが、九州地域の環境に適した良品の系統が見当たらないことから我が国の暖地に自生する野生種を利用した暖地適応型ブルーベリーの作出を目指すものです。更に農業環境の保全について、水田の水質浄化能が高いミズゴケを用いて水田での水質浄化の影響を調査し、機能性を解析する計画です。

2011 年度も本事業発展のための取り組みを推進しました。



約 270 名が参加した最終年度のシンポジウム

(16) 文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業 学術フロンティア推進事業」
幹細胞・ニッチの老化制御を利用した難治性疾患の予防と治療法の開発

【東海大学：2007 年度採択】

本事業は、悪性腫瘍、心・血管系疾患、運動器疾患等の難治性疾患の新規治療、予防法を開発し国民の健康福祉に貢献することを目的としています。本学は難治性疾患に対する様々な再生治療法を開発してきましたが、現状では体外操作や移植に伴う幹細胞の早期老化が不可避であることとニッチ制御が不可能なことが再生治療の進展を妨げています。本事業で、幹細胞システムの老化制御機構を解明し、その分子メカニズムを基盤とした幹細胞の老化制御法を開発するとともに予防医学への応用を目指します。

2011 年度も本事業発展のための取り組みを推進しました。

(17) 文部科学省「原子力人材育成プログラム（原子力研究促進プログラム）」
原子力マイスター育成のための実務と教育のブリッジプログラム

【東海大学：2010 年度採択】

本プログラムは、原子力技術コースの学生と原子力業界との橋渡し「ブリッジ」するためのものであり、コースの履修計画を立てるうえで、現場でも求められる専門知識を具体的に知り、講義間の関連性を強く意識しながら専門知識の修得を進めるために 2 つの支援をおこなうものです。一つは産業界で要求されるスキルを明確にして学生の履修計画を緻密化すること、一つは企業の業務課題を提示して、それを解決する体験を通じて専門性のスキルアップを図ります。こうしたプログラムを通じ、原子力マイスターとして発電部門、保守点検部門、放射線管理部門、サイクル部門等、原子力業界の基幹分野で活躍できる人材を育成するものです。

2011 年度は原子力分野の業務に関する 5 回の講演会を実施、スキルノート作成と原子力施設訪問調査、スキルアップへの課題チャレンジ等に取り組みました。

(18) 文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ（原子力人材育成等推進事業費補助金）」

国際原子力人材育成大学連合ネットの構築とモデル事業の実施

【東海大学：2010 年度採択】

専門教育を受けた原子力人材不足が世界的に極めて深刻な中、原子力教育・研究に携わっている有志の大学が連携して、それぞれの人材育成資源を持ち寄り、横断的、集約的、効果的、効率

的かつ戦略的に国内外の質の高い国際原子力人材を育成するために、産官の支援・協力の下に、国際原子力人材育成大学連合ネットを構築します。また、この新しく構築する国際原子力人材育成大学連合ネットを基に、国際原子力人材育成モデル事業を実施するものです。

東京工業大学を申請代表として、14大学共同で取り組んでいます。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。

(19) 文部科学省「理数学生応援プロジェクト」

社会の多様な場で活躍するサイエンス・マイスター育成プログラム

【東海大学：2010年度採択】

本取り組みでは、高等学校でSSH・SPP等のプログラムを経験してきた問題意識の高い学生や成績優秀な学生を早期に発見し、技術者・研究者としての知見に基づく企画力・分析力・表現力・点検・改善力、いわゆる研究分野におけるPDCAを身につけたグローバル社会の多様な場で活躍できる将来有為な科学技術者・研究者となりうる「サイエンス・マイスター」を育成することを目的としています。

2011年度は、学部横断的な対応が可能な理学部の基礎教育研究室と、学長室、入試センター、研究支援・知的財産本部並びに関連する理工系学部が連携した運営体制の下、2010年度に編成した「サイエンス・マイスター副専攻」プログラムを本格実施しました。具体的には、「サイエンス・マイスター副専攻」の初年次に開講する基礎科学プログラムと専門科学プログラムの一部を実施するとともに、サイエンス推薦入試の実施、更に目標達成の検証としての自己点検評価を実施しました。

(20) 文部科学省「科学技術振興調整費 若手研究者の自立的な研究環境整備促進プログラム」

国際的研究者を育て得るメンター研究者養成

【東海大学：2010年度採択】

本事業は、先端分野における国際的研究をおこなう能力に加え、自らをロールモデルとした後進の研究者を育成するメンターとなりうる人材養成を行うものです。テニュアトラックの期間は創造科学技術研究機構に属し、理想的な環境の中で自己能力の発展に邁進し、テニュア取得後は、学部・研究科に所属しつつ、大学奨励教員として本学に特徴ある研究を通じて次世代育成のための環境作りに貢献します。本事業を契機として全学的システム改革を行い、私立大学における若手研究者育成のモデルを目指します。

2011年度は創造科学技術研究機構医学部門での研究環境を整備し、物的及び人的支援体制を構築するとともに、国際公募により医学部門に3名の教員が着任しました。また、本事業で採用した5名のテニュアトラック教員の先端基礎医学研究の取り組みを学内外に広く理解してもらうためのシンポジウムを開催し、気鋭の国内外の研究者による招待講演も行いました。

更に、昨年度に引き続き、学内の諸施設・規程等の整備を行い、Harvard大学にテニュアトラック教員が留学する等順調に進捗しました。



第2回テニュアトラック制度シンポジウムを開催

(21) 経済産業省「アジア人財資金構想（高度専門留學生育成事業）」

原子力発電分野における高度人財育成プログラム

Global Initiative on Asian Specialized Nuclear Personnel, Tokai University (GIANT)

【東海大学：2010年度採択】

本プログラムでは、アジアの優秀な理工系学部卒業生を対象に、日本の約40年に及ぶ実績と経験を基にした、原子力発電並びに関連技術に関する実務教育を展開しています。安全と安心を最優先する倫理観を持ち、グローバルな展開を目指す日本の原子力企業において、国内外のプロジェクトや現地日本法人等で中核となる人材を養成します。

2011年度も、産学連携専門教育プログラムの実施、ビジネス日本語・日本ビジネス教育、インターンシップ、就職支援等を行いました。プログラムに参加している国費留学生は9名で、学生の国別人数は、タイ（1名）、インドネシア（5名）、ベトナム（1名）、モンゴル（1名）、マレーシア（1名）となりました。また、2011年9月に3名、2012年3月に1名の卒業生を輩出し、国内のプラントメーカーに就職しました。

(22) 科学技術振興機構公募事業「地球規模課題対応国際科学技術協力事業」

カメルーン火山湖ガス災害防止の総合対策と人材育成

【東海大学：2010年度採択】

カメルーンでは1980年代のニオス湖とマヌーン湖での湖水爆発後、ガス災害の再発が懸念されています。湖水爆発を防止するために、湖に溶存しているガスを人為的に除去する作業が進められていますが、マグマからのCO₂の供給速度やCO₂の除去量を見積もるためのモニタリングは行われておらず、湖水爆発のメカニズムの詳細についても解明されていない状況です。

本研究では、両湖で湖水に関する地球化学的研究を行い、CO₂流動系と噴火履歴解明を進めるものです。更に湖水爆発の数値シミュレーションを行い、爆発メカニズムを解明することで、湖の監視体制の確立や防災に向けた総合対策の提案を図るものです。これらの共同研究を通じて、カメルーンの研究者のキャパシティ・ビルディングを図り、両湖のガス災害を予測するために、湖の観測・研究を継続・発展できる体制の確立を目指します。

本学他、国内の4大学、1研究所と共同で研究を進めています。2011年度も本プログラム発展のための取り組みを推進しました。

【研究推進(企画)・知的財産活動】

総合研究機構の各施策は、学園の研究活動の推進・活性化を図るうえで重要な役割を担っています。2011年度の各施策は、理事長を委員長とする総合研究機構運営委員会の承認を得て実施されました。

研究活動の活性化に向けては、研究者の支援体制の強化が不可欠であり、東海大学10校舎の研究支援・知的財産部門の担当者による連絡協議会を年2回開催し、運営方針や事業計画の確認、研究支援体制及び研究関連業務等について協議しました。

(1) 外部資金獲得のための戦略的研究推進活動について

1) 総合研究機構の施策

総合研究機構の施策として、「プロジェクト研究」、「研究奨励補助計画」「研究集会補助計画」「学術図書刊行費補助計画」を実施しています。

① 「プロジェクト研究」

総合研究機構の重点施策として、学園の多様な分野間での連携・融合による特色ある研究

プロジェクトを戦略的・重点的に推進するために実施しています。2011 年度公募は、28 件の応募があり、3 件を採択しました。また、継続分については、8 件を採択しました。

なお、採択プロジェクトについては、研究の進捗状況等のモニタリングを実施するとともに、プロジェクトマネージャーによるフォローアップを行っています。

② 「研究奨励補助計画」

若手及び中堅研究者の育成と研究推進並びに科学研究費を始めとする競争的資金の採択率向上を目的に実施しています。2011 年度公募は、104 件の応募があり、39 件を採択しました。

③ 「研究集会補助計画」

学会等の開催費用の一部を補助するもので、2011 年度公募は、25 件に対して補助しました。

④ 「学術図書刊行費補助計画」

学術研究成果の発表を目的として刊行する学術図書について、その出版費の 2 分の 1 を上限として補助するもので、2011 年度は、応募ゼロでした。

2) 東海大学研究フォーラムの開催

研究費を学内資金より補助している総合研究機構施策等の研究成果発表の場として開催しています。2011年度は、前年度同様、「東海大学産学連携フェア」と同時開催しました。当日は、総合研究機構プロジェクト研究の採択課題13件の口頭発表を行ない、併せてポスターセッションとして、総合研究機構のプロジェクト研究17件、研究奨励補助計画30件、沖縄研究助成4件、連合後援会研究助成8件及び付置研究所コアプロジェクト13件、合計72件の研究発表を行いました。

3) 技術移転 (TLO) 事業の実施

① 特定大学技術移転事業 (承認TLO) の実施

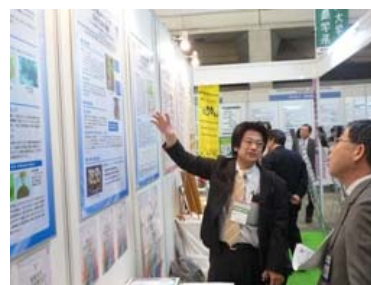
2008 年 3 月、経済産業省・文部科学省から承認 TLO として承認されスタートした「産官学連携センター」は、2011 年度の事業実績報告書を提出しました。事業実績・経費執行については、概ね適正な執行との評価を受け、2011 年度当初予定の補助金交付額 1,150 万円の補助を受ける見込みが整いました。

承認 TLO は、「大学等における技術に関する研究成果の民間事業者への移転の促進に関する法律」に基づき、承認を受けた技術移転事業者に補助金が交付される事業で、本学では、2008 年度 2,697 万 4 千円、2009 年度 2,394 万円、2010 年度 1,978 万円の補助金を受け、2012 年度まで補助金を受けることが内定されています。

② 外部イベントへの出展

産官学連携センターでは、毎年外部機関・団体が主催する各種イベント等に本学の技術シーズ及び技術移転の成果等を出展、併せて当センターの活動状況について紹介しています。2011 年度は、外部イベントに政府主催のイノベーションジャパンをはじめ 25 回の出展、講演会、新技術説明会を行いました。

本学は、首都圏で農学系学部を有する私立 5 大学 (明治・東京農業・日本・玉川・東海) が主催する“アグリビジネスフォーラム”に、第3回から参加しています。2011 年度は、千葉県幕張メッセで開催された「アグリビジネス創出フェア (主催: 農林水産省)」に「アグリビジネスフォーラム in 幕張“未来の食と農を支える首都圏農学系私立五大学”」として参加し、5 大学の農学・食品・健康・バイオ等の分野における最先端の研究成果の発表・展示を行いました。同時開催の「アグロイノベーション 2011」の来場者も同フェアを訪れ、約 900 名がブースに訪れました。



アグリビジネス創出フェアでの模様

その他、北海道地区、静岡地区、九州地区において、各研究支援課がそれぞれの地区の外部イベントに出展しました。これらの活動が、企業等への技術移転・共同研究に繋がり、外部資金の獲得増に貢献しました。

③ 国際産官学連携

2009年3月に本学、タイ王国モンクット王ラカバン工科大学（KMITL）、(財)横浜企業経営支援財団（IDEC）の三機関は、国際産官学連携に関する基本協定を締結しました。本協定に基づき2011年度も、KMITL学生の横浜市内企業でのインターンシップ事業を実施する予定でありましたが、東日本大震災の影響により中止となりました。

また、世界の大学・企業、公設試験研究機関等の技術移転業務関係者が集まる「米国大学技術管理者協会（AUTM）年次総会（米国アナハイム）」に参加しました。本学の医学部の研究成果の情報発信を行うとともに、技術移転・知財ワークショップへの参加や展示ブースの訪問を通じて、各国大学等の技術移転に関する状況や組織体制等についての情報収集及び意見交換を行いました。

4) 大学等産官学連携自立化促進プログラム整備事業の実施

本学は、文部科学省の「大学知的財産本部整備事業（5年間）」に引続いて「産学官戦略展開事業（戦略展開プログラム）」に採択され、2008年度から本事業を推進し、2011年で4年目を迎えました（2008・2009年委託費1,800万円/年、2010・2011年度は補助金）。2010年度より事業の名称が「イノベーションシステム整備補助事業（大学等産学官連携自立化促進プログラム）」と変更となりました。これら一連の事業は、研究支援・知的財産本部の主力事業の一つであり、精力的に活動を行っています。

当該事業では、医学研究科ライフケアセンターが推進する「産学連携プロジェクト・健康医科学研究」を核に推進しており、2011年度は、企業20数社との産学連携活動の場である「健康医科学産業推進協議会」の連携活動を支援しました。具体的には、事業化スキームの具体化検討、成果拡大に向けた企業・自治体との連携強化、知財活動基盤システムの整備、研究実施マネジメントの支援、協議会の運営支援、産学官活動の基盤となるシステムの構築を行い、2012年3月には、定例報告会・シンポジウム「健康医科学～次のステップへ」を開催し、約130名の企業・団体・自治体・大学関係者等が参加しました。

なお、本整備事業は、2012年で終了しますが、医工連携、健康医科学研究プロジェクト等を通じ、ポスト整備事業における大学の産学官連携機能の強化に向け、医学系大学産学連携ネットワーク協議会等の外部機関との連携活動を推進しました。

5) 「東海大学産学連携フェア2011」の開催

本フェアは、大学の研究シーズと企業ニーズとのマッチングを目的として、2004年度から毎年12月に開催しています。2010年度より、本学が戦略的に推進する研究プロジェクトの成果報告会（東海大学研究フォーラム）と同時に開催しました。今年度の産学連携フェアは、97件の研究成果を一堂に紹介するポスターセッションをはじめ、基調講演、パネルディスカッション、湘南校舎17号館地下の高度物性評価施設の見学、情報交換会を行い、学内外合わせて約500名が参加しました。

基調講演は、「中小企業におけるリスクマネジメント・事業継続計画」というテーマで、(株)日本総合研究所理事の鈴木敏正氏が講演しました。

その後のパネルディスカッションは、「日本の新たな競争力・協調力を生み出す産学官連携・共創力とグローバル人材育成」をテーマに、経済産業省産業技術環境局大学連携推



8回目の開催となった「東海大学産学連携フェア2011」

進課長の進藤秀夫氏が特別講演を行い、株式会社秦野精密淵脇忠夫代表取締役、橋本巨研究担当副学長（工学部機械工学科教授）、山田清志教育担当副学長（教養学部人間環境学科教授）、戸谷毅史キャリア支援センター所長（教養学部芸術学科教授）がパネリストとして参加し、モデレータは、小島直也産官学連携センター所長（工学部生命化学科教授）が務めました。産業界・大学・行政それぞれの立場で実務に就く方々による産官学連携における現状課題、急務となっている国際的な人材育成、学内の取り組み事例並びに会場からの意見も含めながら活発な意見交換が行われました。

以上、本フェア等を通じて大学の知的財産・研究シーズを発信、企業ニーズとのマッチング活動及び技術移転を実施しましたが、特許等の知的財産とともに、国内外の研究機関・企業等からのマウス・ラット等のマテリアルの提供依頼が多くなり、今年度も有償での提供を行いました。

(2) 知的財産のライセンス等に伴う対価の取扱い変更について

1) 知的財産の管理に係る基本計画（取扱方針）の策定

本学は、1966年に工業所有権の機関帰属を定め、特に2003年の知的財産戦略本部設置以降、更に積極的な知的財産の保護活動を展開してきました。また、知的財産憲章においても、本学の研究・教育活動での利用と知的財産の社会還元を目的として、創出された知的財産について取り扱うこととしています。

これらの活動により特許権の成立が順調に進む反面、大学が単独で保有する特許は、技術移転が極めて難しく、本学のみならず、多くの大学知財本部の認識は一致しています。また、本学が知的財産の取得・維持に要する経費は、年を追うごとに増加し、特に多額の費用を要する外国出願については、経済産業省の出願支援補助（TLO補助）も2010年度で打ち切られました。

これらの状況を踏まえ、知的財産権の管理における基本方針について、今日までの活動経験を活かした見直しを行い、知的財産の活用に重きを置いた新たな知的財産の管理に係る基本計画（取扱方針）を策定し、教職員に周知しました。

2) 発明者対価の分配方法の追加とその運用

従来、発明者等に個人所得として分配してきた知的財産のライセンス等に伴う対価の還元方法は、在職発明者の要望を受け、「学校法人東海大学知的財産権取扱規程」及び「同細則」の規程改訂により、2011年度から対価の一部または全部を研究促進費として分配することが可能となりました。2011年度は、対象案件6件の内、3件（50%）について研究促進費での分配希望があり、この制度が活用されました。

(3) 研究資金の適正執行体制と研究活動の法令遵守の強化について

東海大学の公的研究費執行体制は、既に確立しており、運用面での統一性、適切性について毎年確認を行っています。2011年度も各校舎研究支援課等による全校舎を対象としたクロス監査を実施し、更に一部の監査には、法人監査室も同行し、監査の適切性について確認を行いました。

一方、教育・研究活動に伴う新たな法令遵守体制整備を強化し規程等の整備も実施してきましたが、従来伊勢原校舎以外の校舎では、不十分な取り組みでありました、「人を対象とする研究」について研究計画の適切性を審査し、103件の承認を行いました。また、「安全保障貿易管理」についても審査を実施し、23件の被該当認定を行いました。これら事前承認が必要な研究計画等について今後更に学内で浸透を深め、機関としてもれないよう手続きを進めていくには、より一層、研究者の理解を得ながら進めていく必要があります。更に、専任職員の教育育成のために関連研修会への積極的な参加を実施し、職員のレベル向上を図りました。

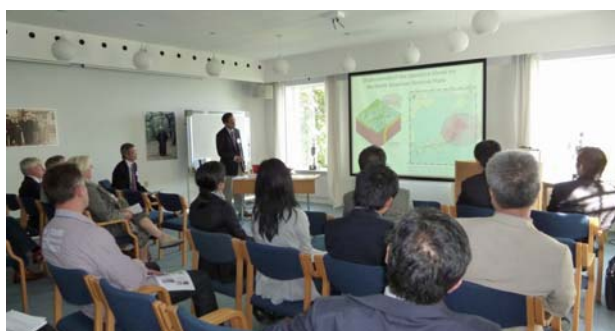
【国際戦略本部事業の活動】

(1) 国際戦略構築のための組織的連携

外務省や文部科学省、経済産業省等の政府機関や国際協力機構（JICA）等の国際関係の諸団体、更には、外国政府機関並びに在日外国公館との連携を積極的に進めました。この結果、人材育成支援無償（JAD）事業のカンボジア人材育成支援事業、アフガニスタン人材育成支援プロジェクトに参画が可能となりました。また、カザフスタン、サウジアラビア王国政府、オマーン、アラブ首長国連邦から政府奨学生を獲得することができました。

(2) 国際的な研究推進の環境整備

アジア・環太平洋学長研究所長会議で培ったノウハウを活かし、南米ペルー共和国と本学との研究交流をはじめとする学術交流の活性化を趣旨として、東京にて開催された第二回日本・ペルー学長会議の事務局を務めました。同会議はペルーの主要国立大学から学長ら7人が来日し、両国の学術交流の新たな展開を目指して有意義な議論が交わされました。また、タイ・バンコクにおいて、6月に協定校モンクット王ラカバン工科大学の協力のもと、日・タイの研究者による東日本大震災・原子力発電所事故に関する国際シンポジウムを開催し、更に、9月には本学ヨーロッパ学術センターにて、日本と北欧の研究者による関連テーマのシンポジウムを開催しました。



東海大学ヨーロッパ学術センターで開催した国際交流セミナー

(3) 受入派遣留学プログラムの充実

派遣プログラムについては、短期プログラムを1年次生が参加できるように改め、応募者並びに実数で対前年度比1.4倍を達成しました。

受入プログラムについては、3月11日の東日本大震災の影響を受け、協定校からの留学生の多くが途中帰国しましたが、秋学期にはほぼ前年度並みに回復しました。また、文部科学省のショートステイ（SS）プログラムに採択された「大震災後の日本と大学の役割研修」等、4種類の短期プログラムを新規に実施し、合計50名の外国人学生が参加しました。

(4) 数値目標を伴う留学生募集活動の展開

留学生倍増という中期目標達成のため、外国政府奨学金等の外部資金による留学生の招致や、海外にある同窓会組織の活用、国内外における留学フェアへの参加等、戦略的な留学生募集活動を数値目標が伴うかたちで展開しました。しかしながら、東日本大震災の影響を受け、別科日本語研修課程入学試験並びに留学生一般入学試験の出願者が減少しました。

(5) 国際交流のためのインフラ整備

外部資金導入による学内の国際交流施設の拡充の実現をめざし、長期的な戦略に基づいた国際活動の拠点としての外国人留学生用施設の整備等、学園内全体の国際交流のためのインフラ整備実現の検討を行いました。また、海外における国際活動の拠点として、ホノルルのパシフィックセンター（ハワイ東海インターナショナルカレッジ）の移転について検討プロジェクトが実施され、2014年にハワイ大学ウエストオアフ校地内へ移転することで決定しました。

(6) 国際広報の強化・充実

2011年度より海外に対する入学広報を入試センターから国際戦略本部内の OASIS (Office of Admission Services for International Students) に移管しました。東日本大震災からの復興状況や日本の安全性を海外に広報し、日本留学の促進を図り、また、国際広報活動の更なる充実によって、海外での東海大学の認知度を高める活動を積極的に展開しました。

(7) 外地機関運営についての再構築

海外施設の運営モデルを再構築し、広く学外の利用も促進して自主財源で賄えるような組織形態への転換について検討しました。タイのモンクット王ラカバン工科大学構内に設けていた通称本学アジアオフィスが、正式に「海外連絡事務所バンコク」として始動しました。

【情報化推進】

少子化やグローバル化に伴う中教審の答申をはじめ、学術会議の提言や産業界等からの要請で異口同音に求められているのは「質の保証」であり、換言すれば「学士力」の保証ということになります。

特に、入学試験の多様化に伴い基礎学力や学修力等が低下し、学力水準の担保が困難になりつつある現状を改善するためには、情報化の推進を通して教育環境の改革と改善が迅速に求められるとされています。

今年度は、学生の実態を把握し適切な教育・学修支援環境の整備と各教育段階の連携・接続性を重視して次のような情報化の推進に努めてきました。

(1) 情報の共有化による学生・生徒の実態把握

(2) カリキュラムの接続性を重視した高大連携による教材の共同研究・開発及び教授法（教育方法）の研究

2011年7月23日（土）には「情報化推進研究会」を高輪校舎で開催し、湘南校舎にサテライト会場を設け、高画質会議システムを実験的に導入してソフト、ハード双方からの今後の課題を確認しました。

- 1) 新学習指導要領に対応した「教科情報」の研究・教材開発の方向性
- 2) 新しい「理科教育」に関する共同研究・教材開発の必要性
- 3) 入学前学習と初年次教育の接続性を重視した教材研究・開発への取り組み



高輪校舎で開催した「情報化推進研究会」の様子

(3) 各組織間のコミュニケーション環境の整備と改善

- 1) 授業支援システム「Course Power (400 ユーザ同時アクセス)」の採用によって早期進学決定（付属推薦・AO型入試）に伴う基礎学力強化支援の可能性を明確にしました。
- 2) 入試決裁の効率化を目指し、新システムを導入しました。
- 3) ビジュアルコミュニケーションを活用した遠隔会議や授業を各付属高等学校と大学各キャンパス間で試行しました。

2. 初等中等教育機関

【教育機関再編事業の推進】

(1) 東海大学附属第二高等学校の創立50周年事業

東海大学附属第二高等学校は創立50周年を迎え11月19日に記念式典が開催されました。記念事業として、人工芝を敷設した日本サッカー協会及び国際サッカー連盟の公認施設として「松前記念サッカー場」の建設を2012年度に予定しています。また、2012年度より校名を「東海大学附属熊本星翔高等学校」に変更し、制服も変更します。抜本的な教育改革を推進し、詰め込み式の教育とは一線を画した、確かな学力を涵養する教育を実現するとともに、全生徒の部活動参加を基本とし、学習と部活動の両立を目指します。



松前記念サッカー場完成予想図

【FD（教育力向上）の強化推進と諸制度の充実】

(1) 教育改革・授業改革の実践について

東海大学入学者約7,000名のうち2,300名～2,500名が附属推薦生で占められています。特に、この数年間附属高等学校の在学生の減少が続いていますが、東海大学への附属推薦生の入学者数は大きく減少することなく、常に一定数を確保しています。

そのため、初等中等教育部では各校との連携を密にとり、毎年附属推薦制度を改変しながら時代に即応した体制を整えてきました。その結果、2012年度附属推薦入試（2011年度実施）は、2010年度に実施した「内部推薦早期内定」を更に強化し、6月期内定者数約2,000名を目標に、全附属高等学校に定められた達成値の実現に向けて努力しました。

附属推薦で進学する生徒を早期に確保するのは、全国的なAO入試の早期化等の外的要因に対応するとともに、東海大学入学者のレベルを維持・向上させる目的を持ちます。更に、東海大学一貫教育体制の指導を受けた附属生は、東海大学での学生生活を充実させる牽引者の中核として活躍することも求められています。そこで「附属推薦内定後10か月指導対策委員会」を立ち上げ、内定後の学習指導だけでなく、入学から卒業までの日ごろの学習活動や部活動について、より効果的な指導プランを検討し、実施してきました。

また、その動きに呼応するように、大学の附属推薦に対する取り組みも変更してきています。高等学校・大学の更なる連携を図るために、高大連携運営委員会も設置され、各専門部会も設けられ活発に活動しました。

(2) 理系進学者増への取り組み

一貫教育委員会（2005年度・2006年度）の第二部会（理数・工系教育の推進と試行及び教材開発）からの提言を受け、初等中等教育機関の各校では、理系進学者を増やす取り組みを継続して行っています。

2007年度から「女子理工系進学者を増やすための委員会」を設置し、「理科実験と交流会」を開催する等、高等教育機関と初等中等教育機関が協力して中高生の理系進学者を増やすための具体的方策を検討し、活動は2008年度に引き継がれ、2009年度には、女子に限定せず、宿泊研修に発展させて引き継がれています。2011年度は学園オリンピック参加関係者のための学部説明会とリンクさせ、活動が更に進路と直結するよう工夫し、中高生に対して早期に興味づけができ

るようにしました。

2011年度には、各校の理科授業を実験を中心に展開することを目的に「実験を重視した理科授業の定着推進委員会」を立ち上げました。学年に応じて必ず身に付けさせたい素養を決め、その素養に対応できる実験等の資料をパッケージ化しました。今後、様々な資料を付属校全体で共有することで、更なる推進に繋げていきます。

また、「中高生を理系進学に繋げるための委員会」の活動や、全付属高等学校のSPP（サイエンス パートナーシップ プロジェクト）取得を目指す等の方針を継続し、学園オリンピック理科・数学部門等の活動を中心に東海大学ならではの教育を実践しました。

2008年度、2009年度と継続して開催した「SPP・SSH（スーパーサイエンスハイスクール）成果発表会」は、2010年度は東日本大震災の影響で開催できませんでしたでしたが、2011年度は開催場所を高輪キャンパスに移し、参加生徒30名、教職員35名と過去最大規模の実施となりました。またWeb EX（Web会議システム）を用いて当日参加できなかった高等学校や大学の各機関を結び、学園全体に広く活動内容を報告することができました。



SPP・SSH 成果発表会

(3) 教科研究授業への取り組み

2008年度からの学園教科モデル校によって定着した公開研究授業を、全ての教科を対象に「公開研究授業」として現在も継続しています。各教科の講評会では、授業参観結果から教科会議の方針に沿った授業展開が出来ているかの検証や改善の方向付け、長所を更に伸ばす工夫等の積極的な話し合いを重ねる取り組みを継続しました。

授業改革の一環としての授業評価アンケートの実施については、ようやく定着してきましたが、生徒へのフィードバックや教科等で具体的にどう活かし、どれだけ授業改善が図られたかを検証することが重要な課題です。

特に付属推薦が早期化する中、日ごろの授業の取り組みが最も重要であり、これこそが基本であることを認識し、「付属推薦内定後10か月指導対策委員会」を立ち上げ、「学習」「部活動」「試験結果の活用」の3分野に分けて、充実した10か月間の高校生活を送らせるための学習指導モデルを示しました。各校とも一層の理解を深め、内定後に限らず、入学から卒業までの全ての期間において、更なる授業改善の取り組みに力を入れました。

(4) 教員研修計画

2011年度も、教員総合人事制度の目的である教員の資質向上と能力開発を更に充実させるため、人事考課制度の昇格システムと連動させ、研修対象者の研修成果をより高めるために、研修内容を精査し、全体研修やグループ研修を取り入れ、充実した教員研修を実施しました。

- 1) 資格等級別研修会：4つの資格等級で昇格後3年間、資格ごとに年1回実施。
- 2) 役職者研修会：新規校園長と副校長・教頭を対象に年1回実施。分掌主任・室長・学年主任は、課題研修を実施。
- 3) 考課者研修会：新規一次考課者に年1回実施。
- 4) 新規格付け予定者（中級職1・2種）講習会：研修ビデオを視聴のうえ、課題レポートを実施。
- 5) 教員ディベート研修：現場に生かせる理論と実践法の宿泊研修を実施。
- 6) 土曜研修：各付属校から数学・英語・理科の教員各1名以上が、代々木キャンパスや各校に参集し、土曜研修を実施。また、7月下旬に宿泊研修を実施。
- 7) 学校研修：「個の研修」から「教科を単位としたグループ研修」にも力を入れ、対象校の授業力向上を目指す取り組みを実施。

- 8) 資格等級別課題論文：年2回実施。
- 9) 新採用教員講習会：望星学塾を会場に一泊二日で実施。

(5) 特色ある幼・小・中・高から大学への一貫教育の確立と生徒募集

2012年度入学生確保については、各地域の立地や状況に応じて改革策を講じました。比較的順調に園児確保が安定している九州地区の幼稚園（2園）や、人気低下とは言え中等部入試も堅調でした。

高等学校で特筆すべきは、大改革を行った附属第二高等学校（2012年4月より附属熊本星翔高等学校）では150名以上の増加を実現し、募集定員を大幅に上回る結果となりました。付属浦安高等学校、附属相模高等学校及び付属仰星高等学校も募集定員を上回る入学者数となり順調な結果でした。付属高輪台高等学校及び付属望洋高等学校は学則定員を若干下回りましたが、全体的にはほぼ計画どおりの募集ができたことが大きな収穫です。

また付属第四高等学校や附属第五高等学校においても、地域のスポーツクラブ等との連携により、学則定員は下回ったものの昨年度よりも入学者数を伸ばしており、地道な募集活動が着実に結果に結びついています。

それぞれの校園が「東海大学の付属」であることと「特色ある教育」により地域で評価される校園として成長することが、安定した健全経営に繋がるのであり、それらを具現化するために「付属高等学校共通パンフ」を作成し、全付属（連携校・提携校含む）が生徒募集用資料として活用して成果をあげました。特に部活動による専願入学希望者を増加させることが今後の課題です。

(6) 各校園の学則定員、募集定員の見直しと適正教員数の配置

2010年度までに生徒募集の現状を見極め、必要に応じて各校園の「学則定員」「募集定員」を見直してきました。また、計画的な教員採用と人事異動の活性化を継続し、学校規模や特性に配慮した適正教員数により近づけるための人事異動を行いました。

今後も継続して教科ごとのバランスを考慮し、専任率・年齢構成を学校規模に合わせて整備し、安定した経営基盤の構築に努めていきます。

【その他初等中等教育機関における主な活動】

(1) 学園オリンピック

学園オリンピックは東海大学独自の一貫教育を具現化した教育プログラムです。東京オリンピック開催を記念して1964年に始まった当初はスポーツ大会として行われていましたが、年々部門を充実させ、現在では国語部門、数学部門、理科部門、英語部門、芸術（造形）部門、芸術（音楽）部門、知的財産部門、ディベート部門、スポーツ大会の9部門が設けられています。対象となるのは本学園の高等学校と中等部で学ぶ全生徒で、毎年5月に芸術（音楽）部門、8月には高校生を対象にスポーツ大会がそれぞれ3日間、湘南キャンパスで開催されます。他の7部門は7月末から8月初旬の6日間、夏季セミナーとして東海大学孺恋高原研修センターで開催されます。学園オリンピックの目的は、本学園の付属校と東海大学の教員が一体となって若者の才能を伸ばすこと



理科部門



スポーツ大会

にあります。他者と競い順位づけすることが狙いではなく、才能あふれる生徒たちが相互に刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく場になっています。同時に優れた才能を早期に発見し、それをいっそう大きく育てるという重要な役割も担っています。

2011年度は芸術（音楽）部門に82名が応募し、二次審査を通過した22名が参加しました。スポーツ大会には9競技に1,895名の生徒が参加しました。また7部門の夏季セミナーには合計で2,371名が応募し、各部門の審査を通過した163名が参加しました。

スポーツ大会を除く文化部門の成績優秀者には東海大学、短期大学への特別奨励入学の道も用意されています。教員と寝食をともにしながら学びの面白さを体験し、学校や学年の垣根を越えて友情を深めることができます。学園オリンピックは東海大学ならではの、きわめて個性豊かな教育プログラムです。

(2) 海外研修

本学園ではヨーロッパ学術センターやパシフィックセンター等、海外に様々な関係施設を有しており、国際化時代を担っていく若者のために、これらの施設を利用した海外研修制度を設けています。毎年冬には、希望者を募って「附属高校生のためのヨーロッパ研修旅行」を実施。デンマーク、ドイツ、オーストリア、フランス等のヨーロッパ各国を訪れ、デンマークでは東海大学の「建学の精神」の源流に触れ、ヨーロッパの文化を体感し幅広い人間形成を図っています。



附属高校生のためのヨーロッパ研修旅行

また2000年度より「ハワイ中期留学制度」(SHIP: Senior High School Intercultural Program)を実施。高校3年生の1月～2月の52日間にわたってハワイ東海インターナショナルカレッジに留学し、国際的視野の体得、自立心の確立を目指します。2011年度は41名の附属高校生がプログラムに参加し、この年代にこそふさわしい貴重で有意義な体験を積んでいます。

(3) 社会貢献

本学園では社会教育の一環として、様々な社会貢献活動に取り組んでいます。例えば「東海大学建学の地・三保の松原美化運動」は1966年より活動を開始。自然美化と同時に人を思いやる気持ちを育むことを目的に、静岡地区にある本学園の各教育機関で学ぶ園児、児童、生徒、学生と教職員が地元自治体と協力しながら、静岡市清水区にある三保の松原とその周辺を清掃しています。第46回を迎えた2011年度の美化運動では、約2,000名が参加しました。

また、山形高等学校では、生徒会による東日本大震災被災地ボランティア活動を実施。生徒会執行部が夏休みに山形ボランティア隊の協力を得てボランティアに参加した体験をもとに全校生徒に参加を呼びかけたもので、10月、11月の2ヵ月間で継続して4回実施しました。宮城県の石巻市と女川町を中心に、草刈作業、物資の整理と飲料水の運搬、側溝の泥さらいの作業等、高校生として携わることのできる作業を懸命に続けました。この活動に先だって、気仙沼市図書館にダンボール10箱分の辞書類を寄贈しました。



東海大学山形高等学校の生徒たちによるボランティア活動

3. その他の機関

【付属病院群】

病院本部主導のもと各病院間の緊密な連携により、医学部付属4病院の診療連携・経費削減・医療安全を更に推進し、4病院連結した収支での単年度黒字が継続できました。また、医師不足対策として、臨床助手・臨床研修医の募集対策や医師(教員)の採用を積極的に行いました。医師・看護師・技術職員・事務職員を含めた全職種の横断的なチーム医療を推進し、更に個々の業務を見直すことで、勤務環境の改善を図りました。

(1) 医学部付属病院について

前年度に引き続き、高稼働の病床、県内外からの多数の外来患者を受け入れ、全国病院ランキングで3年連続1位に位置づけられる等、全国トップレベルの運営を維持しています。

1) 収益性をふまえた運用、施設・設備の再検討

- ① 大磯病院との医療連携ワーキングや入院診療の外来化を行う等、高回転の病床運用に対応する施策を行った結果、単月の平均在院日数が11.00日を記録する等、着実に成果を挙げています。また、入院診療の外来化により、入院収入に比べて外来収入が伸びています。
- ② 外来診療機能のうち、特にがん患者への「放射線治療」及び「化学療法」等、今後患者数の増加が予測される分野に対し、施設の整備、外来診療スペースの再編を検討し、放射線治療装置の設置、化学療法室の拡充工事、外来診療ブースの新設等の2012年度計画を立案、予算化でき、実施に向けて着実に進めています。

2) 診療報酬改定対策

- ① 2012年4月の診療報酬改定に対して、行政や他医療機関との会議等を中心に情報を収集し、各種委員会で常に状況を報告、医事課が中心となって改定説明会を行いました。
- ② 診療報酬改定に対応するため、チーム医療推進体制の拡充整備及び看護補助体制の強化を図るとともに、当該診療科との協議により、入院診療の外来化や移植外科の新設等、診療体制の見直し・変更を行いました。

3) 医療安全の徹底

- ① 医療事故の防止策及び業務改善の継続的な実施と業務効率化と安全管理を同時に実現するため、看護助手採用による補助業務の実施や職種間業務分担の見直し、また、診療報酬にも影響するチーム医療を推進しました。病棟への薬剤師配置については、2013年度開始を目途に準備を進めています。
- ② 全国的に報告されている新型感染症や多剤耐性菌による院内感染について、院内感染対策室を中心に、各種委員会での対策・啓発活動、病棟ラウンド等を行い院内感染の防止対策を行いました。
- ③ 薬剤部を中心に各部署の協力を得て、向精神薬や麻薬、治験薬・高額希少医薬品の院内管理体制を抜本的に見直し強化しました。

(2) 医学部付属東京病院について

2011年度は、当院の中期目標である「収支均衡」の達成に向け、効率的な病院運営を心掛け、医療収入の増加と経費の削減を目指しました。

1) 医療収入の増加対策

医療機関への積極的な訪問で、紹介患者の増加を図るとともに、日常での交流・イベントを通して患者の積極的な受け入れを行いました。その結果、年間で約2,400名の紹介患者を受け

入れました。

また、健診センターの充実を図るため、今年度は、受診者受け入れのための施設整備の拡充及び機器類の更新と健康保険組合等を訪問し、新規受診者の開拓も並行して行い、2012年度以降の受診者増のための環境整備を行いました。

2) 経費削減の推進

業務内容の見直しを積極的に行い、委託費等約7,000万円を削減しました。水道光熱費も病院全体の取り組みで、2010年度対比約5.62%の削減となりました。医療用機器の損耗更新は、新規購入を一部分に抑え、付属病院・八王子病院からの転用で対応したことにより、機器備品費の支出を約4.75%抑えることができました。

(3) 医学部附属大磯病院について

1) 医療収入の増加対策

- ① DPC（診断群分類包括評価）導入に伴い各診療科に対して診断群毎の適正な入院日数、診断名の選択方法等の説明を行い、従来比で約5%の増収効果が図られました。このことにより、昨年度を上回る医療収入を得ることができました。
- ② 本年度開設した総合内科は、救急車や地域の高齢者施設からの救急患者受け入れを中心に順調な診療を行い、収入面でも高い活動性を発揮しています。

2) 近隣医療機関、高齢者施設等との連携促進

- ① 中郡医師会と協議会の開催及び本年度から開始した公開講座の共催並びに「医学豆知識」の発行による積極的な広報活動を通じて連携を強化し、大幅な紹介患者増に繋がりました。
- ② 近隣高齢者施設との連絡会を通じて、施設からの患者受け入れによる医療収入向上と入院患者の転院先確保を図っています。
- ③ 本年度設置した患者支援センター入退院支援部門は、付属病院からの転院をシステム化するとともに、一般患者に対しては、計画的な入退院指導を行うことで、昨年度を上回る患者を受け入れし、併せて医師、看護師等の業務負担軽減と医療安全向上に寄与しています。

3) 経費削減対策

- ① 委託金額については、継続業務では前年比4%の削減を行いました。また、新規業務では、従来専任職員が担当していたものを委託に替えることで、人件費の圧縮が図られました。
- ② 大型医療機器の血管造影装置とCT装置を2カ年計画で導入するにあたり、病院本部の指導に基づき、付属病院で導入予定の機器とのスケールメリットを図ることで大幅な値引きを得ました。
- ③ 医療経費については、各種の啓発活動により、年間を通じて30%以下の低率に抑えることができました。

4) 将来構想

- ① 血管造影装置とCT装置並びにPACS（医療画像情報システム）を本年度末に導入することで、来年度当初からの医療収入向上と業務の合理化に繋げることが可能となりました。また、ナースコールの更新やホルマリン除去装置の設置等職員の勤務環境改善を図りました。
- ② 病院本部との定期的な会議で医療収入向上の方策、リハビリ病棟の将来計画及び混合病棟から専門病棟への移行等の検討を行いました。また、年度末には、将来構想検討小委員会を立ち上げました。

(4) 医学部附属八王子病院について

1) 医療収入増加対策

- ① 2011年度は、稼働数を415床から425床に増床しました。平均稼働率は、救急患者を断らない方針が教職員に浸透した結果、目標をほぼ達成できました。
- ② 人間ドック受診者獲得のために内視鏡希望者の増加に対応すべく、関係者の協力を得て、2011年10月下旬から内視鏡コースの予約枠を8名から14名に拡大しました。
- ③ 2011年度に患者支援センターを設置し、更なる医療連携と患者サービスの向上を目指しました。特に、救急車を断らない方針と救命救急医の配属が入院患者増につながる一要因となり、患者支援センターの下においた入退院センターのベッド調整機能が功を奏し、効率的な病床運用ができました。

2) 経費削減対策

毎月、各会議体で医療経費状況報告を行い、全教職員に医療経費削減のための協力を呼びかける等の継続した経費削減に取り組みました。しかし、新薬で値引率の低い高額医薬品の使用を抑えることができず、医療経費率を押し上げる要因となりました（医療経費率は対前年度比で約1%増加）。医薬分業に関しては、継続的な検討を行い、最大の課題であった用地選定に概ねの目処がたったため、2012年度に法人本部並びに病院本部の承諾を得るように調整を図る予定です。

3) 放射線治療装置導入の準備

ほぼ計画どおりに放射線治療装置の購入、改修工事、要員計画、各種申請手続きを行い、4月から放射線治療を開始することができました。運用に関しては、当院に配属される教員が2012年4月1日付で採用され、順調に推移する見込みです。

4) 研修棟2（仮称）の設計

予定どおり500床全床開床を想定したうえで、不足が予測される居室（教授室、図書室、カンファレンス室、委託職員更衣室等）を考慮した研修棟2の設計を行いました。2012年度には、建設に着手する予定です。

4. 教育環境整備の推進

現在、本学が実践している「特色ある人材育成教育」の一つであるチャレンジセンター活動の中には、地域の活性化を目指し、各キャンパスに自治体及び近隣住民を巻き込んだ活動が展開されており、これらの活動を更に充実させることにより、今まで以上に地域との良好な関係を築きました。秦野市、平塚市及び伊勢原市とは、それぞれ連携協定の締結時期は異なるものの、3市との30年近くにおよぶ協力関係の実績を踏まえ、行政だけに留まらず、市内の県立高等学校、商工会議所及び各種市民団体等との交流も盛んとなっており、更に充実した協力体制を築きました。2011年度は、近隣市町村の一つであり、医学部附属大磯病院が設置されている大磯町と、長年の交流実績を踏まえ、連携協定を締結し協力関係を強化しました。

既に地域連携協定を締結している愛媛県西条市、長野県茅野市及び石川県能登町とは、教職員や学生の派遣等を通じて「大学と連携した地域づくり事業」を中心に交流を実施しました。

また、代々木校舎、高輪校舎、沼津校舎、清水校舎、熊本校舎、阿蘇校舎、札幌校舎及び旭川校舎の各校舎においても湘南校舎同様に、各種公開講座の開催や自治体との共同研究及び委員派遣等の事業を通して地域との協力関係を更に強固なものとししました。

(1) 長期計画に基づく教育施設・設備等について

厳しい財政状況の中ではありますが、急務となっている次の事業を優先的に実施しました。

1) 継続工事

- ① 高輪校舎新校舎新築工事
- ② 伊勢原校舎職員寮新築工事
- ③ 観光学部設置に伴う代々木校舎 4 号館耐震補強及び改修工事
- ④ 工学部医用生体工学科設置に伴う伊勢原校舎 1 号館 8 階改修工事
- ⑤ 湘南校舎 2 号館耐震補強工事



高輪校舎 2 号館

2) 新設他工事

- ① 湘南校舎理工系実験研究棟建替計画（設計）
- ② 湘南校舎 3 号館免震補強工事
- ③ 伊勢原校舎 5 号館食堂増築工事
- ④ 附属小学校・幼稚園校（園）舎新築工事
- ⑤ 附属高輪台高等学校総合グラウンド人工芝整備工事
- ⑥ 附属相模高等学校 1 号館及び 2 号館空調設備更新工事



附属小学校・幼稚園校（園）舎小学校ゾーン



附属小学校・幼稚園校（園）舎幼稚園ゾーン

2011 年度決算の概要

事業計画に基づく、施設や教育活動にかかる 2011 年度決算の概要は、以下の通りです。

資金収支計算書の概要

2011年度資金収支計算書

自 2011年4月 1日

至 2012年3月31日

収入の部

学校法人東海大学

(単位：百万円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
学生生徒等納付金収入	50,360	50,378	△ 18
手数料収入	1,131	1,156	△ 25
寄付金収入	1,629	1,686	△ 57
補助金収入	13,185	14,195	△ 1,010
資産運用収入	1,098	1,255	△ 157
資産売却収入	58	173	△ 115
事業収入	62,517	63,009	△ 492
雑収入	3,653	3,892	△ 239
借入金等収入	8,003	8,003	0
前受金収入	8,701	8,665	36
その他の収入	13,543	14,952	△ 1,409
資金収入調整勘定	△ 21,461	△ 22,947	1,486
前年度繰越支払資金	44,510	44,510	0
収入の部合計	186,927	188,927	△ 2,000

前年度とほぼ同数の大学・短大・初等中等機関約 45,000 人の学納金収入を計上

大学・短大・初等中等機関約 47,000 人の検定料収入を計上

国庫経常費補助金の単価増、及び震災復興に係る補助の増等を計上

企業等からの受託事業収入及び医学部附属病院の医療収入を計上(対前年度 21 億円増額)

大学・短大・初等中等機関約 13,000 人の学費前受金収入を計上

支出の部

学校法人東海大学

(単位：百万円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
人件費支出	65,407	65,376	31
教育研究経費支出	47,569	46,642	927
管理経費支出	7,545	7,247	298
借入金等利息支出	903	909	△ 6
借入金等返済支出	11,756	11,756	0
施設関係支出	6,841	6,560	281
設備関係支出	5,473	5,278	195
資産運用支出	831	1,194	△ 363
その他の支出	12,147	12,430	△ 283
予備費	0	0	0
資金支出調整勘定	△ 9,019	△ 13,695	4,676
次年度繰越支払資金	37,474	45,230	△ 7,756
支出の部合計	186,927	188,927	△ 2,000

教員・事務職員・技術職員他約 6,900 人の人件費を計上(退職金約 30 億円含む)

教育及び研究活動に係る経費、並びに修繕費他、事務経費を計上

校舎建設及び改修費用、教育研究用機器等を計上(附属病院看護師寮新築工事、高輪校舎 2 号館新築工事 他)

※上表の額は十万円単位を四捨五入して掲載してあります。なお、一部の科目で端数処理による誤差を調整しております。

収入の部において、学生生徒等納付金収入は学生生徒数(約 45,000 人)が前年度とほぼ同数であったことから概ね前年度並の 503 億 7,800 万円となりました。手数料収入は、受験者数については大幅に増えたものの併願受験者に対する併願制度の改定があったため前年度とほぼ同額となりました。補助金収入については、国庫経常費補助金の一般補助の単価増及び震災復興にかかる補助の増、並びに競争的資金の獲得に取り組んだことから補助金全体で 141 億 9,500 万円と前年度を上回る大幅増となりました。事業収入についても、附属病院群の運営状況が継続して堅調であったことから、医療収入の増額等で 630 億 900 万円となりました。

支出の部においては、ここ数年来実施してきた人件費抑制施策の効果で人件費は減少となり、それ以外の経費についても徹底した予算管理と経常経費の節減に努めた結果、医療収入の増に伴う医療経費の増や前年度からの繰延工事の実施があったものの、人件費、教育研究経費・管理経費の経常支出全体で前年度とほぼ同額に抑えることができました。施設設備関係支出については、前年度から繰延となった代々木校舎での観光学部授業開講に伴う 4 号館改修工事及び防災機能等強化緊急特別推進事業として湘南校舎の耐震工事等の他、附属病院職員寮新築工事、高輪校舎 2 号館新築工事、附属小学校・幼稚園の校舎新築工事、附属病院高額医療機器購入及び大学の教育研究用 PC システムリースの更新等により前年度より 47 億 5,800 万円の増加となりました。

前年度からの繰延工事や新築工事等多額の施設設備投資がありましたが、借入金に依存することなく収入の増と支出抑制に積極的に取り組んだ結果、次年度繰越金が 452 億 3,000 万円と前年度より約 7 億円の増額となりました。

消費収支計算書の概要

2011年度消費収支計算書

自 2011年4月 1日
至 2012年3月31日

消費収入の部

学校法人東海大学

(単位：百万円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
学生生徒等納付金	50,360	50,378	△ 18
手数料	1,130	1,156	△ 26
寄付金	1,684	1,801	△ 117
補助金	13,184	14,195	△ 1,011
資産運用収入	1,098	1,255	△ 157
資産売却差額	45	90	△ 45
事業収入	62,517	63,009	△ 492
雑収入	3,653	3,898	△ 245
帰属収入合計	133,671	135,782	△ 2,111
基本金組入額合計	△ 10,736	△ 9,910	△ 826
消費収入の部合計	122,935	125,872	△ 2,937

資金収支の計上額以外に機器備品や図書等の現物寄付を約 1.1 億円計上

土地及び車両等の売却益を計上

学校法人を永続的に維持するために必要不可欠な資産（校舎・グラウンド等）を自己資金で維持することを目的とし、そのための収入を消費支出に充当させないために帰属収入から優先的に控除される額を当期の基本金組入額として計上

消費支出の部

(単位：百万円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
人件費	67,037	67,015	22
教育研究経費	58,096	57,287	809
管理経費	8,750	8,485	265
借入金等利息	902	909	△ 7
資産処分差額	895	1,165	△ 270
徴収不能引当金繰入額	85	65	20
予備費	0	0	0
消費支出の部合計	135,765	134,926	839
当年度消費支出超過額	12,830	9,054	3,776
前年度繰越消費支出超過額	175,956	175,956	0
翌年度繰越消費支出超過額	188,786	185,010	3,776

資金収支の計上額以外に退職給与引当金繰入額、及び退職給与引当金特別繰入額約 17.2 億円計上

資金収支の計上額以外に建物・機器備品等の減価償却額を約 116 億円計上

建替及び老朽化に伴う建物・機器備品・図書等の除却額

※上表の額は十万円単位を四捨五入して掲載してあります。なお、一部の科目では端数処理による誤差を調整しております。

資金収支計算書の概要の他、消費収入の部では、機器備品等の現物寄付金 1 億 1,400 万円、道路拡張工事による湘南校舎土地売却等に係る固定資産売却差額 9,000 万円の計上により、帰属収入は 1,357 億 8,200 万円となりました。基本金の部は付属病院職員寮新築工事及び高輪校舎 2 号館新築工事並びに湘南校舎の耐震工事等にかかる組入額を計上し 99 億 1,000 万円となり、消費収入の部合計は 1,258 億 7,200 万円と前年度に比べて 25 億 2,800 万円の増額となりました。

消費支出の部では、人件費には 2011 年度から計上の退職給与引当金特別繰入額 16 億 2,800 万円（本学は 10 年での均等積み上げを選択）及びここ数年来繰入を要さなかった退職給与引当金繰入額 9,000 万円、教育研究経費・管理経費には施設・設備等の減価償却額 116 億 100 万円及び奨学金免除額 1 億 1,300 万円が計上されています。また、付属病院旧職員寮及び備品・図書等に係る除却等を資産処分差額として 11 億 6,500 万円、医療収入の未回収等に充当する徴収不能引当金繰入額を 6,500 万円計上し、消費支出の部合計は 1,349 億 2,600 万円となりました。

以上により、帰属収支差額は 8 億 5,600 万円の収入超過、帰属収支差額比率 0.6% となり、前年度に引き続き 2 年連続で帰属収支差額における収入超過を達成することができました。ただし、消費収支差額は 90 億 5,400 万円の支出超過となっています。

貸借対照表の概要

貸借対照表

2012年3月31日

資産の部 (単位:百万円)

科 目	本年度末	前年度末	増 減
固定資産	272,458	272,907	△ 449
流動資産	59,922	58,350	1,572
資産の部合計	332,380	331,257	1,123

負債の部

科 目	本年度末	前年度末	増 減
固定負債	51,396	53,268	△ 1,872
流動負債	30,796	28,658	2,138
負債の部合計	82,192	81,926	266

基本金の部

科 目	本年度末	前年度末	増 減
第1号基本金	426,095	416,184	9,911
第4号基本金	9,103	9,103	0
基本金の部合計	435,198	425,287	9,911

消費収支差額の部

科 目	本年度末	前年度末	増 減
翌年度繰越消費支出超過額	185,010	175,956	9,054
消費収支差額の部合計	△ 185,010	△ 175,956	△ 9,054

科 目	本年度末	前年度末	増 減
負債の部・基本金の部及び消費収支差額の部合計	332,380	331,257	1,123

※ 上表の額は十万円単位を四捨五入して掲載しております。なお、一部の科目で端数処理による誤差を調整しております。

土地・建物・機器備品・図書・車両等減価償却に見合う投資を行い差引約 4.5 億円の減少)

有価証券・貸与奨学金・各種引当資産を計上(現金・預金が約 7.2 億円増、未収入金が医療収入の増加等により約 10 億円増)

返済期限及び支払期限が 1 年以上先となる長期借入金・未払金等を計上(長期借入金約 41 億円減、リース物件に係る長期未払金が約 5.7 億円増、退職給与引当金が約 16.4 億円増)

返済期限及び支払期限が 1 年以内となる短期借入金・未払金等を計上(翌年度返済予定となる短期借入金が約 3 億円増、資産となったリース物件に係る支払リース料の増加や医療経費等の増加に伴い短期未払金が約 10 億円増、翌年度分学費の入金が震災後の平常並金額に戻ったため預り金が約 8 億円増)

学校法人の諸活動を永続的に維持するために必要不可欠な固定資産(校舎・グラウンド等)を計上

学校法人の諸活動を永続的に維持するために恒常的に保持すべき資金を計上(支払資金が不足した際に恒常的に保持すべき資金にて充当するという性格を持ち、学校法人会計基準においては文部科学大臣の定めた額として前年度決算額ベースで約 1 か月分の支払資金を保持すべきとされる)

資産の部においては、有形固定資産において減価償却 116 億 100 万円等の資産減があったものの、付属病院職員寮新築、高輪校舎 2 号館新築、付属小学校・幼稚園の校舎新築、付属病院高額医療機器購入等減価償却に見合う施設設備投資によって、固定資産全体では前年度に比べて 4 億 4,900 万円の減少に留まりました。流動資産において、震災に対応するための医薬品等の在庫が増加した前年度に対し貯蔵品は減少となりましたが、現金預金及び未収入金が増加したことで前年度に比べて全体で 15 億 7,200 万円の増加となり、資産の部合計では前年度より 11 億 2,300 万円の増加の 3,323 億 8,000 万円となりました。

負債の部では、固定負債において 2011 年度から開始した退職給与引当金特別繰入 16 億 2,800 万円により退職給与引当金及びリース資産に係る長期未払金の増がありましたが、当面新規借入金をしない方針としていることから長期借入金が 40 億 8,500 万円減少しており、固定負債全体では 18 億 7,200 万円減少することとなりました。また流動負債は医療経費等に係る未払金や翌年度学費の納付分等預り金が増加したことによって 21 億 3,800 万円の増加となり、負債の部合計では 821 億 9,200 万円となり、前年度から 2 億 6,600 万円の増加となりました。

基本金の部においては、要組入額 4,690 億 4,300 万円に対して、施設設備支払に係る未払金等による未組入額 338 億 4,500 万円を考慮し、当年度末基本金の部合計は前年度より 99 億 1,100 万円の増加し、4,351 億 9,800 万円となりました。その結果、当年度の消費支出超過額は 90 億 5,400 万円となり、翌年度繰越消費支出超過額は 1,850 億 1,000 万円となりました。

以上により、負債の部・基本金の部及び消費収支差額の部合計は前年度より 11 億 2,300 万円増加の 3,323 億 8,000 万円となりました。

2011年度の決算においては、収入の増加や支出の抑制、新規借入によらない施設設備投資が実施できたこともあり、全体的には収支改善の図れた決算となりました。ただし依然として消費収支差額をプラスとするには至っておらず、前年度に引き続き翌年度繰越消費支出超過額が増加している状況に変わりはありません。学園としての魅力ある教育研究環境整備をこれまで以上に推進していく為には、収支改善を継続していくことが必要不可欠なことから、帰属収支差額プラスを念頭に引き続き収入増と支出の抑制に努めてまいります。

経年比較表

資金収支計算書

(単位:百万円)

		2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
収入の部	一) 学生生徒等納付金収入	54,155	52,142	50,303	50,409	50,378
	二) 手数料収入	1,088	1,087	1,116	1,158	1,156
	三) 寄付金収入	2,033	2,069	1,564	1,667	1,686
	四) 補助金収入	12,807	12,717	12,781	12,811	14,195
	五) 資産運用収入	1,625	1,397	1,174	1,138	1,255
	六) 資産売却収入	173	87	1,747	358	173
	七) 事業収入	53,819	56,014	58,098	60,876	63,009
	八) 雑収入	3,756	4,131	4,822	3,982	3,892
	九) 借入金等収入	7,743	9,104	11,505	9,003	8,003
	十) 前受金収入	8,852	8,519	8,891	8,741	8,665
	十一) その他の収入	11,303	11,874	12,958	14,105	14,952
	十三) 資金収支調整勘定	△ 20,553	△ 21,138	△ 22,189	△ 21,637	△ 22,947
	十四) 前年度繰越支払資金	50,016	44,882	42,426	44,890	44,510
	合 計	186,817	182,885	185,196	187,501	188,927
支出の部	一) 人件費支出	65,922	66,589	65,876	65,767	65,376
	二) 教育研究経費支出	44,264	45,179	45,362	46,164	46,642
	三) 管理経費支出	8,564	8,024	7,599	7,274	7,247
	四) 借入金等利息支出	1,205	1,094	1,027	983	909
	五) 借入金等返済支出	13,453	11,511	11,510	11,502	11,756
	六) 施設関係支出	2,396	4,994	6,442	3,645	6,560
	七) 設備関係支出	2,178	2,303	6,770	3,435	5,278
	八) 資産運用支出	882	667	724	635	1,194
	九) その他の支出	13,485	10,708	11,270	15,560	12,430
	十二) 資金支出調整勘定	△ 10,414	△ 10,610	△ 16,274	△ 11,974	△ 13,695
	十三) 次年度繰越支払資金	44,882	42,426	44,890	44,510	45,230
	合 計	186,817	182,885	185,196	187,501	188,927

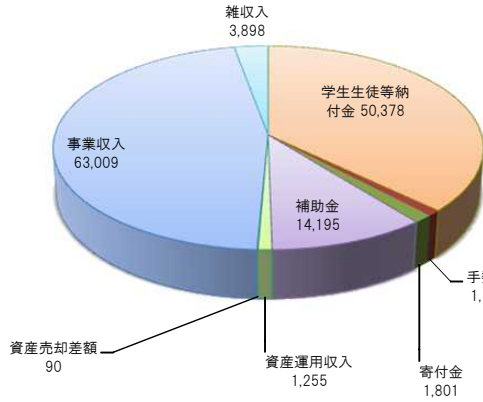
消費収支計算書

(単位:百万円)

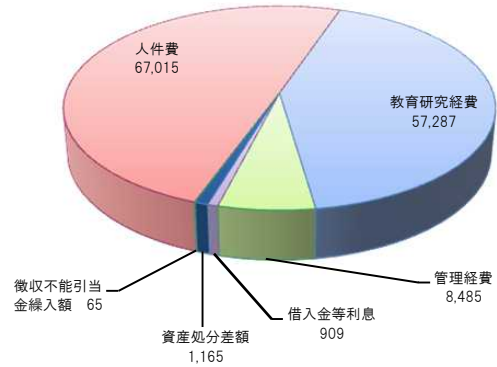
		2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
帰属収入の部	一) 学生生徒等納付金	54,155	52,142	50,303	50,409	50,378
	二) 手数料	1,088	1,087	1,116	1,158	1,156
	三) 寄付金	2,182	2,290	1,699	1,826	1,801
	四) 補助金	12,807	12,717	12,781	12,811	14,195
	五) 資産運用収入	1,618	1,392	1,169	1,136	1,255
	六) 資産売却差額	62	25	1,680	13	90
	七) 事業収入	53,819	56,014	58,098	60,876	63,009
	八) 雑収入	3,758	4,186	4,822	3,986	3,898
帰属収入合計		129,489	129,853	131,668	132,215	135,782
基本金組入額		△ 4,719	△ 2,628	△ 7,495	△ 8,871	△ 9,910
消費収入の部合計		124,770	127,225	124,173	123,344	125,872
消費支出の部	一) 人件費	65,833	66,488	65,743	65,629	67,015
	二) 教育研究経費	54,495	54,718	55,380	56,035	57,287
	三) 管理経費	9,738	9,081	8,695	8,430	8,485
	四) 借入金等利息	1,205	1,094	1,027	983	909
	五) 資産処分差額	1,294	2,471	702	966	1,165
	六) 徴収不能引当金繰入額	61	378	187	75	65
	七) 予備費	0	0	0	0	0
消費支出の部合計		132,626	134,230	131,734	132,118	134,926
当年度消費支出超過額		7,856	7,005	7,561	8,774	9,054
前年度繰越消費支出超過額		144,760	152,616	159,621	167,182	175,956
翌年度繰越消費支出超過額		152,616	159,621	167,182	175,956	185,010

※2008年度以前の消費支出の部「六) 徴収不能引当金繰入額」は、「六) 徴収不能額」です。

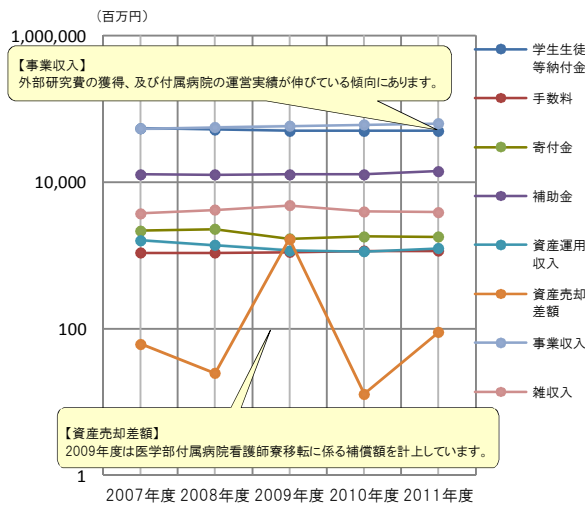
2011年度 帰属収入構成図 (百万円)



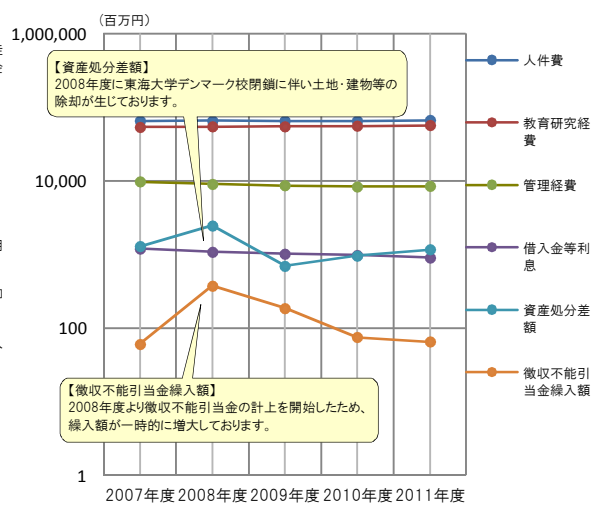
2011年度 消費支出構成図 (百万円)



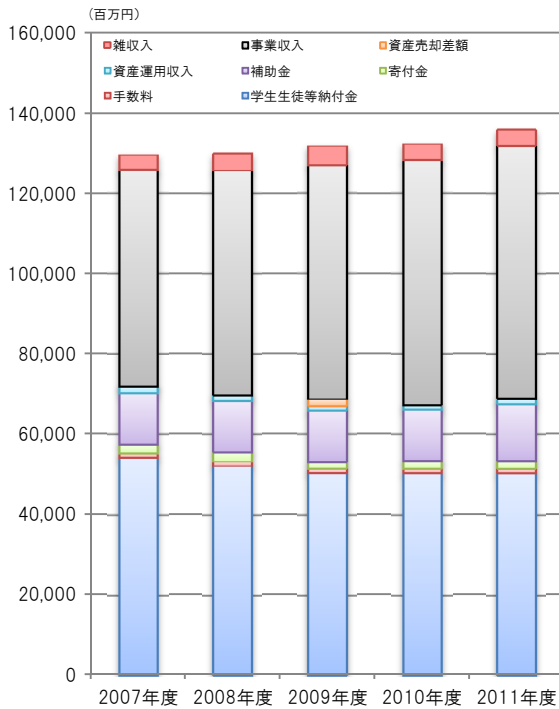
帰属収入科目別経年比較



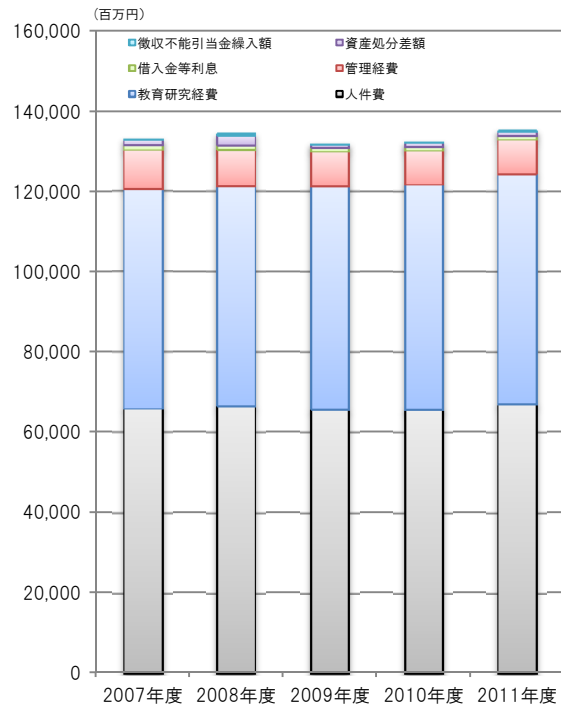
消費支出科目別経年比較



年度別帰属収入構成図



年度別消費支出構成図



学校法人東海大学

消費収支分析	算出式(%)	適正水準	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	全国平均値
人件費比率	人件費／帰属収入	↓ (60%)	50.8	51.2	49.9	49.6	49.4	49.7
人件費依存率	人件費／学生生徒等納付金	↓	121.6	127.5	130.7	130.2	133.0	93.3
教育研究経費比率	教育研究経費／帰属収入	↑	42.1	42.1	42.1	42.4	42.2	35.8
管理経費比率	管理経費／帰属収入	↓ (5%)	7.5	7.0	6.6	6.4	6.2	7.2
借入金利息比率	借入金等利息／帰属収入	↓ (1%)	0.9	0.8	0.8	0.7	0.7	0.4
消費支出比率	消費支出／帰属収入	↓	102.4	103.4	100.1	99.9	99.4	95.4
帰属収支差額比率	(帰属収入－消費支出)／帰属収入	↑	△ 2.4	△ 3.4	△ 0.1	0.1	0.6	4.6
消費収支比率	消費支出／消費収入	↓ (80%)	106.3	105.5	106.1	107.1	107.2	107.5
学生生徒等納付金比率	学生生徒等納付金／帰属収入	↑	41.8	40.2	38.2	38.1	37.1	53.3
寄付金比率	寄付金／帰属収入	↑ ↓	1.7	1.8	1.3	1.4	1.3	2.3
補助金比率	補助金／帰属収入	↑ ↓	9.9	9.8	9.7	9.7	10.5	10.2
経常費補助金比率	経常費補助金／帰属収入	↓	8.6	8.4	7.9	8.1	8.2	—
基本金組入率	基本金組入額／帰属収入	(20%)	3.6	2.0	5.7	6.7	7.3	11.3
減価償却額比率	減価償却額／消費支出	↑ ↓	8.4	7.9	8.3	8.5	8.6	9.9

↓ 低いほどよい
 ↑ 高いほどよい
 ↑ ↓ どちらともいえない

※ 全国平均値は、日本私立学校振興・共済事業団「平成23年度版 今日の私学財政 大学・短期大学編」より引用しております。

貸借対照表経年比較表

資 産 の 部

(単位:百万円)

科 目	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
固 定 資 産	281,886	276,438	278,286	272,907	272,458
有 形 固 定 資 産	242,852	237,262	238,205	233,272	232,862
土 地	67,519	67,469	67,407	68,145	68,238
建 物	129,016	124,624	125,884	120,680	120,155
構 築 物	14,981	14,049	13,383	12,559	12,715
教育研究用機器備品	12,858	11,262	13,346	12,155	12,525
図 書	16,237	16,423	16,585	16,726	16,805
建設仮勘定	1,289	2,475	856	2,192	1,478
その他有形固定資産	952	960	744	815	946
その他の固定資産	39,034	39,176	40,081	39,635	39,596
諸引当資産	22,900	22,721	22,498	22,158	22,188
ソフトウェア	0	0	717	751	558
松前重義記念基金	9,299	9,728	10,055	10,398	10,733
その他固定資産	6,835	6,727	6,811	6,328	6,117
流 動 資 産	56,664	55,174	58,843	58,350	59,922
現 金 預 金	44,882	42,426	44,890	44,510	45,230
未 収 入 金	11,114	11,990	13,243	12,833	13,791
その他流動資産	668	758	710	1,008	901
資 産 の 部 合 計	338,550	331,612	337,129	331,258	332,380

負 債 の 部

科 目	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
固 定 負 債	56,839	54,332	56,172	53,268	51,396
長 期 借 入 金	46,126	43,720	43,723	40,970	36,885
長 期 未 払 金	0	0	1,985	1,987	2,562
退職給与引当金	10,611	10,510	10,377	10,239	11,878
その他固定負債	102	102	87	72	71
流 動 負 債	28,034	27,980	31,723	28,658	30,796
短 期 借 入 金	3,511	3,510	3,502	3,756	4,088
未 払 金	10,191	10,342	13,988	11,661	12,736
前 受 金	8,852	8,519	8,891	8,741	8,665
その他流動負債	5,480	5,609	5,342	4,500	5,307
負 債 の 部 合 計	84,873	82,312	87,895	81,926	82,192

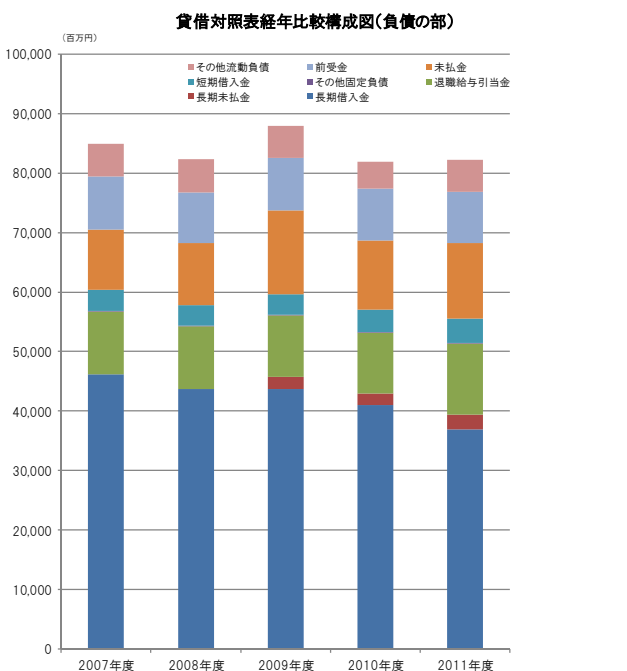
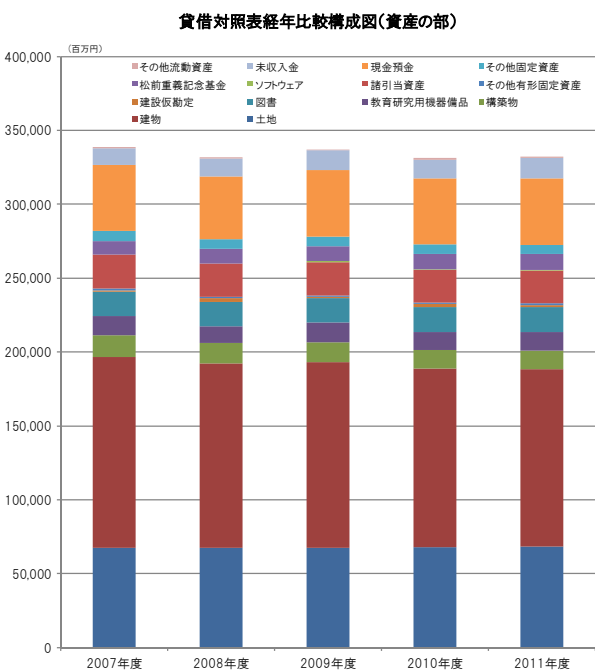
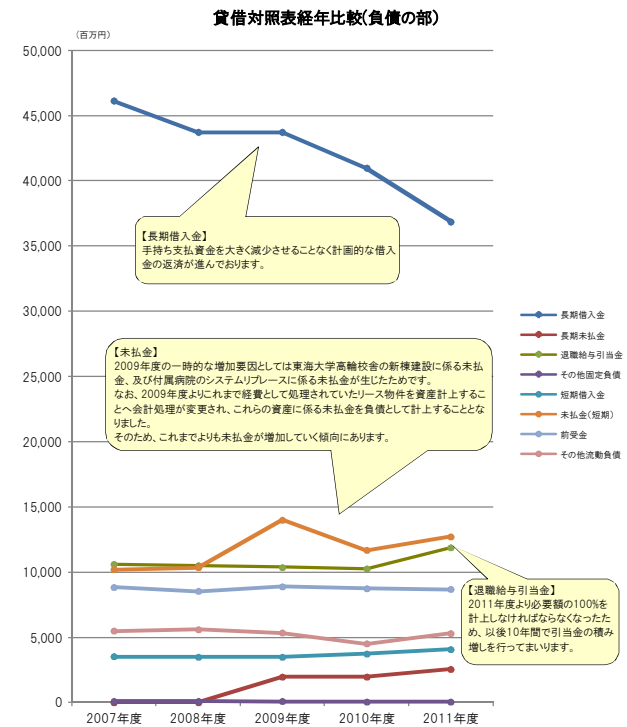
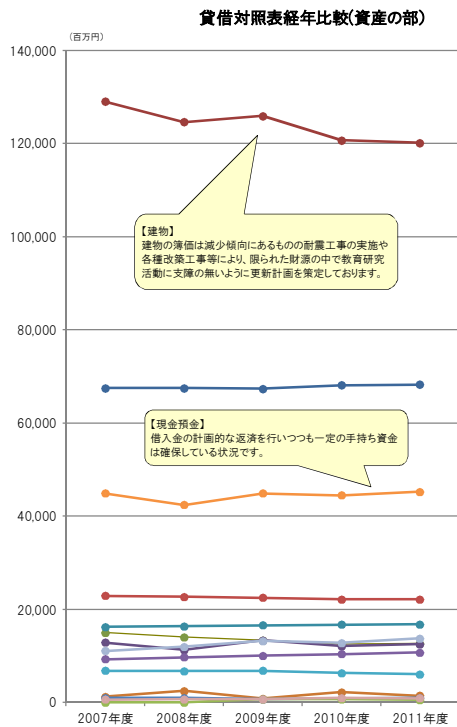
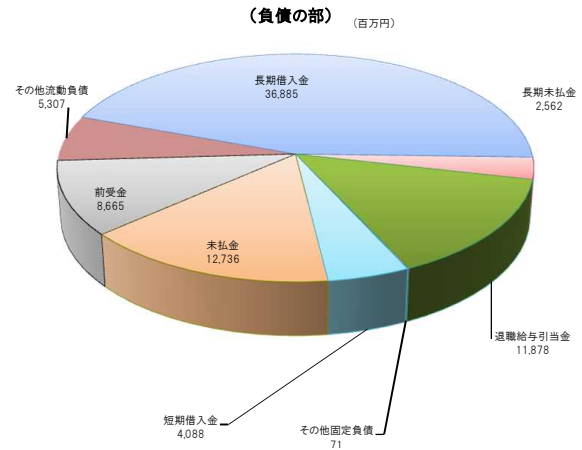
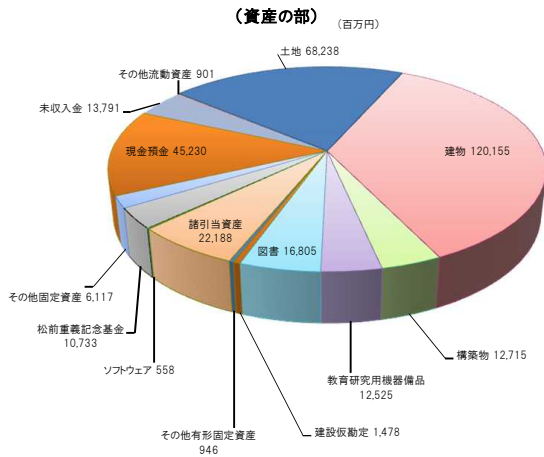
基 本 金 の 部

科 目	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
第 1 号 基 本 金	397,190	399,818	407,313	416,184	426,095
第 4 号 基 本 金	9,103	9,103	9,103	9,103	9,103
基 本 金 の 部 合 計	406,293	408,921	416,416	425,287	435,198

消 費 収 支 差 額 の 部

科 目	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
翌年度繰越消費支出超過額	152,616	159,621	167,182	175,956	185,010
消費収支差額の部合計	△ 152,616	△ 159,621	△ 167,182	△ 175,956	△ 185,010
科 目	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
負債の部・基本金の部及び消費収支差額の部合計	338,550	331,612	337,129	331,258	332,380

2011年度 貸借対照表構成図



5. 監事による監査報告書

監 査 報 告 書

学 校 法 人 東 海 大 学
理 事 会 御 中
評 議 員 会 御 中

私たち学校法人東海大学の監事は、私立学校法第37条第3項及び寄付行為第13条の2の定めに基づき、学校法人東海大学の平成23年度（平成23年4月1日から平成24年3月31日まで）の業務及び財産の状況について監査いたしました。

監査の方法は、理事会及び評議員会に出席するほか、理事から業務の報告を聴取し重要な決裁書類等を閲覧し、主要な関係部署において業務及び財産の状況を調査し、計算書類につき検討を加えました。

監査の結果、学校法人東海大学の業務に関する決定及び執行は適切であり、計算書類すなわち、資金収支計算書、消費収支計算書、貸借対照表及び財産目録は、会計帳簿の記載と合致し、法人の収支及び財産の状況を正しく示しており、学校法人の業務又は財産に関し不正の行為又は法令若しくは寄付行為に違反する重大な事実はないものと認めます。

平成24年5月17日

学 校 法 人 東 海 大 学

監 事

横 塚 禎 二



監 事

淵 上 真 之



